少数民族モンの逐次刊行物（ミャンマーとタイ）

―異榻同夢の文語共同体―

和田理寛
神田外語大学

1. はじめに

ミャンマーで発行される少数民族の逐次刊行物について、近年、研究や報告が蓄積され、その現状や課題が明るみになりつつある。しかしその多くは「エスニック・メディア」とよばれる時事報道を主とした刊行物の分析、あるいは少数民族地域のジャーナリズムをめぐる議論に偏っている。では、ここに文芸雑誌など他の出版物をふくめ独立後から今日まで見渡したとき、少数民族関係の逐次刊行物全体について、いかなる絵が描けるだろうか。

本章ではミャンマーの少数民族のひとつであるモン（Mon）を例にとりあげ、関連する逐次刊行物について、いつ、誰が、どのように刊行してきたか通時的に概観したい。こうした逐次刊行物の分析は、ミャンマーの少数民族をめぐる言語使用状況、さらに同国の民族運動全体を理解するための入口のひとつとして重要である。またモンはタイ国にも住んでいる。そのため比較対象としてタイ国のモン関連の逐次刊行物についてもわずかだがとりあげたい。

モンは、現在のミャンマー南東部やタイの中部・北部にて、今の多数派民族に先駆けて文明を築いた人びとと考えられている。碑文に残るモン語資料は、ビルマ語やタイ語より古い。時代が下るにつれ、政治、言語、人口などにおいて、現在の多数派であるビルマやタイに圧倒され、今はどちらの国でも少数民族の地位に甘んじている。

タイ国では公的なモン人口の列挙をしていない。また民族アイデンティティは複層的かつ状況によって揺れ動くものであり、民族人口の把握そのものが困難だ。が、ひとまず参考として、タイ国のモン民族団体代表を長くつとめたスエット氏による 1969～72 年の調査がある。同調査によれば当時の同国モン人口は約 9 万 4 千人である。なお現在のタイ国内では言語的な同化が急速に進み、30 代以下のモン語話者はほとんどいない（ミャンマーからの移民を除く）。そのため後述のように、タイ国で発刊されるモンの民族雑誌は、その内容の多くがタイ語で執筆されている。

ミャンマーのモン人口について。最新データでは同国総務局の民族人口記録があり、それによればモン人口は 130 万人超、国内人口の約 2.7%を占める［中西 2022: 114］。モン集落は、その民族名を冠するモン州（1974 年設立）の中部から南部を中心として

近隣の州・管区にも広がる。なおモン州といっても多民族から構成され、ビルマやカレンなどの集落も多い。同一民族はある程度、村単位での集住傾向があり、それがモザイク状に分布すると考えればよい。またヤンゴンなど都市部には仕事や進学のために移り住んできたモンが少なからずいる。タイとは異なり、ミャンマーでは主に村落部においてモン語を母語とし日常的に話す人びとが多くいる。またモン語話者といってもモン語の読み書きに長けた者は少数であるが、そうした人びとも一定数みられる。とくにモンの仏教僧は、国の教学試験をモン語で受験できることもあり、母語を介した仏教学習に勤しんできた者が多い。児童を対象としたモン語の夏期講習も広く行われている。筆者の試算では、毎年モンの若者の約 5 人に 1 人がこの夏期講習に参加している。夏期講習の教師や運営者には仏教僧の姿も目立つ。また政府容認のもと、モンの民族団体が運営する「モン民族学校」が 140 校以上あり、モン語とビルマ語のバイリンガル教育バイリテラシー教育に成功している。このモン民族学校には現在約 2 万人の生徒が通学し、モン語の読み書きができる若者を毎年社会に送り出している［和田 2016 ; IMNA（2022/5/17）］。本章でとりあげるモン語で書かれた逐次刊行物は、こうしたモン語リテラシーをもつ者を読者層とし、そして同時に彼らが参加するモン文語世界の形成に重要な役目を担っている。本章の対象国も、一定のモン語話者と読者層を有し、モン関連の逐次刊行物の種類が豊富なミャンマーを中心としたい。

ミャンマーでモンの人びとが制作する逐次刊行物は、1948 年の独立前後から姿を見せ、発行主体、媒体、内容におけるさまざまな変化を経て、現在でも刊行がつづけられている。70 年の間で変化がみられるのはある意味当然だろう。ただし本章は、そうした変化という意味での〈動〉にくわえて〈静〉の面、つまり、この期間をとおして、つねにモン語で書かれた雑誌が世に出回っていたという事態にも意識を向けたい。もし記事によって伝えたい内容があるなら、同国のモンの人びとのほとんどはモン語とビルマ語のバイリンガルであるため、ビルマ語で執筆しても用は足りるはずだ。むしろモンの人びとの間でも、ビルマ語を読める人のほうが、モン語を読める人よりずっと多いため、ビルマ語で書いたほうが読者層は広がる。ところが合法的な国内出版も、非合法の地下出版も、この 70 年間モン語で刊行をつづけてきたのであり、その意味について無視するわけにはいかないだろう。同床異夢の対義語を異榻同夢というそうだが、モン語の逐次刊行物からは、出版による言語共同体の確立という点で、文化団体も武装組織も立場をこえて同じ夢をみてきたといえる。B. アンダーソンの有名な議論が出版、言語、ナショナリズムの関係を論じたように、ネーションとは主義主張に訴える精神的な産物とは限らず、同じ書き言葉を使うことによって生み出される一定の広がりをもった閉鎖的な空間そのものでもあるだろう。ミャンマーという国が長い軍政期とときおりの民政期を経験し、それによってそこに暮らす人びとが言論や出版の自由をめぐる大きな変化の渦にまきこまれてきたにもかかわらず、その間ずっと各少数民族語の出版が存続し、国内に言語共同体としてのネーションが複数生まれ長く継

続してきたのは興味深いことだ。

モンの事例はこうした〈静〉の面に注目するためには適当な題材でもある。少数民族の多くはその内部が多様性に富み、観察者としては、統合や団結といった理念より、複雑な現実に目を奪われる。しかしどちらが正しいとか誤解とかではなく、実際は、民族とは統合と分散の両ベクトルとの間を往復していると考えたほうが妥当ではないか。そしてモンの刊行物に注目することは統合にむかう動きを捉えるのに便利である。そもそもモンは民族としての内的多様性が相対的に乏しい。ミャンマー政府は公認の原住民族として 135 民族を数え、さらにこの 135 集団を８つの上位グループにまとめるが、モンだけは上位と下位のカテゴリーの区別がない。多数派のビルマ民族でさえ、上位カテゴリー「ビルマ」のなかに、ビルマ、ダウェー、ベイといった９つの下位カテゴリーが設定されているにもかかわらず、である。こうした公的な認識だけでなく、実際にモン文語は、各地の口語発音の多様性を包摂しうる共通の表記体系をもち、多少の綴りや語彙の違いはあっても、ほとんど「標準語」として機能している。またモン文語の主要な担い手はモン仏教僧だが、その高い移動性と社会的威信が、書き言葉の標準化を支えている[1]。内部共通性の高いモンやその文語世界をとりあげることは、極端な事例ではあるが、ミャンマーの少数民族を論じるうえでひとつの有用な視点を提供することになろう[2]。

なお本章は上記議論にくわえ、モン関係の逐次刊行物を整理することがもうひとつの目的である。そのため、やや冗長となるが、各紙・各誌の制作者、発行部数、価格などの刊行状況について確認できる範囲で記述する。なお本章でとりあげる逐次刊行物がすべてではなく、筆者が確認できず抜け落ちてしまった雑誌や新聞もまだ存在するのは間違いない。とはいえ以下にあげる逐次刊行物だけでも、モンの人びとがかなりの数の刊行物を作ってきたことが伝わるだろう。

2. ミャンマーにおけるモン関連の逐次刊行物

ミャンマーにおけるモン語の書籍や刊行物の数は、ビルマ語に次いで多いのではないかとする指摘がある［Bauer 1990: 36］。この確認には今後ほかの少数民族と比較する作業が必要となるが、以下で見るように逐次刊行物だけでもかなりの種類のモン語出版物が発行されてきたのは確かである。

この節では、独立後の民政期、社会主義時代、その後 1988 年から現在、という３つの時代にわけて、ミャンマーにおけるモン民族関連の逐次刊行物を整理したい。大き

[1] 文語だけでなく、モン口語にも標準語があり、仏教僧院がその威信を下支えするという指摘は Shorto［1962: x］を参照。

[2] ミャンマーの民族的多様性は、単に複数の民族が暮らすというだけにとどまらない。人口規模や、サブグループなどの階層、内部の言語的な均質性・多様性などについては、民族ごとの違いが大きい。本稿はモンを事例としたが、他の少数民族の逐次刊行物をとりあげれば、また異なる議論が必要となろう。

な流れとしては、社会主義時代まで文芸雑誌がほとんどを占めるのにたいして、1988年以降は合法的な文芸雑誌がひきつづき刊行されるほか、「エスニック・メディア」による合法または非合法の時事情報紙の発行が活発化し、さらに 2011 年民政移管後の出版自由化によって新しい環境に投げ込まれていくという変動のストーリーがある。しかし、こうした〈動〉だけでなく、３つの時代をまたいでモン語の逐次刊行物の出版が継続し、それによって言語共同体が再生産されつづけてきたという〈静〉の面にも注目したい。

また、2011 年以降の出版自由化はミャンマー国内の出版事情を一変させた転換点であったが、少なくともモンの逐次刊行物を整理するかぎり、2011 年を分水嶺とみなすより、その前後の連続性に注目したほうが有用である。例えば、現在まで存続するモンの有力な「エスニック・メディア」は、1990 年代と 2000 年代の軍政期にうまれた合法または非合法の媒体である。

加えて、モン文語の主要な担い手であるモン仏教僧が、逐次刊行物の発行にどうかかわってきたかについても、不十分ではあるが、各所で触れておきたい。

2-1. 独立後の民政期（1948-1962）

イギリスから独立した 1948 年から 1962 年の軍事クーデタまで、民政期のミャンマー（ビルマ）市民は出版や表現の自由を謳歌した。日刊紙だけで 30 紙以上が発刊されるなど、アジア域内で出版活動が最も自由かつ最も活発な国のひとつであったといわれる［Soe Lynn Htwe 2017: 11; Brooten, McElhone and Venkiteswaran 2019: 17］。

一方、現存するモン関連の逐次刊行物はそれほど多くない。確認できたのは、主要な文化団体による小冊子『モン通信』と、大学生がつくった雑誌『年刊モン大学生協会マガジン』の 2 点である。前者は時事情報も載る月刊総合誌、後者は年刊の文芸雑誌という点で違いがある。双方ともモン語による記事を掲載している[3]。

『モン通信』（The Mon Bulletin / M. လိုက်ပရိုင်မဉ် / B. မွန်သတင်းစဉ်)

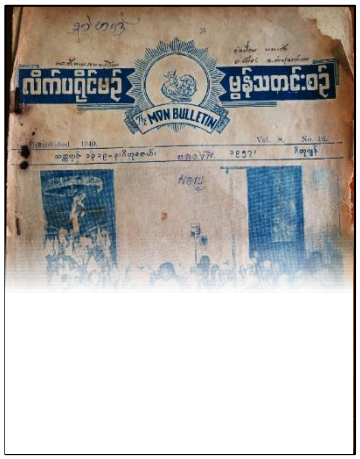
独立前の 1940 年創刊。10～20 ページほどからなる中綴じ小冊子形態の月刊誌[4]。出版地はヤンゴン、編集責任者は仏教僧ワーヤマ（以上 1956～1958 年の現物より、ただし不揃い)。各号それぞれモン語版とビルマ語版の２つがあり、両者の内容は異なっている。また一部はビルマ語とモン語の記事がひとつの冊子に収録されている号もある（1956 年 2 月号など)。

[3] マーティン・スミスはモン語の刊行物として、英領期には新聞 *Hongsawadoi*、独立後民政期には刊行物 *Danangsoi* があったと指摘する［Smith 1994: 114］。筆者は今のところ現物を確認できていない。

[4] 巻号は 7 月はじまり。原則として毎巻 7 月号が No.1、翌年 6 月号が No.12。

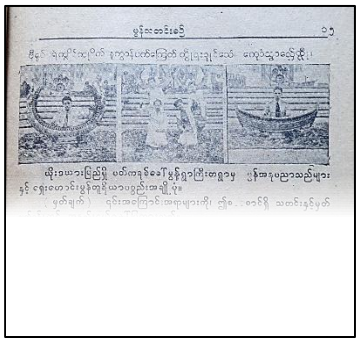
記事は主に訓話や評論と、時事ニュースからなる。いずれも一般的な内容と、モン民族関連の記事が混在する。例として 1957 年 6 月号（Vol.8, No.12）を確認してみたい。

表紙はビルマ語モン語の両版共通であり、民間モン文化団体 ARMA（後述）が主催する第 10 回モン語経典朗誦試験会場を訪問した ARMA 常任顧問ウー・ヌ首相、宗務大臣バソー、ARMA 役員ほかが五戒を受ける様子の写真が掲載されている。



『モン通信』（ビルマ語版）1957 年 6 月号の表紙。

同号ビルマ語版（全 8 頁）は訓話や評論として、知識人と善人、平和構築、仏教教育の大切さ、乳児養育上の注意、モンの栄光回復、モン人口推計といった、仏教、健康、自民族などにかんする記事が並ぶ。ニュースは、一般的内容としてインフルエンザ蔓延状況とその注意喚起、およびイェー（現モン州南部）までの鉄道開通予定の 2 点があり、ほかは公立学校で使うモン語教科書、大学でのモン語授業開講承認、学生モン語作文コンテストの予定といったモン語教育関連の記事が目立つ。また民族団体関連の情報として、ARMA 入会申請方法や、ARMA バゴー地方支部年次集会報告、そしてモン語教育業務などのために政府が設立した「モン務会」（B. မွန်ရေးရာအဖွဲ့ / M. ဗော်ပရောင်ကောင်ကာမန်）[5]の第 15 回会議録（部分）が収録されている。



『モン通信』（ビルマ・モン二言語版）1956 年 2 月号の一部。タイ国パークレット（ノンタブリー県）のモン伝統楽器に関する説明が載る。

一方、同じ 1957 年 6 月号のモン語版（8 頁+付録 2 頁）にも訓話や評論が多い。ビルマ語版と同様に、仏教、健康、民族にかんする内容が並ぶ。ただし、記事内容そのものはビルマ語版と異なっている。すなわち、善行と転生、民族愛、自言語での会話推奨、妊婦の栄養、清涼飲料水と健康、岩石からの石油採取、モン語教師になるための条件や心構え、モン大会の雰囲気、といった訓話や評論がモン語で書かれている。モン語版のニュース記事は、モンの地域から離れたミャンマー国内の列車横転事故だけである。またこの『モン通信』配達遅滞の理由説明文があり、そこではタイ国への配送問題にも触れていて、国境を挟んだ交流をうかがえる点が興味深い。

アシュレイ・サウスによれば、この『モン通信』の発行者は ARMA（全ラーマンニ

[5] 本章では、B.はビルマ語、M.はモン語、T.はタイ語を指す。

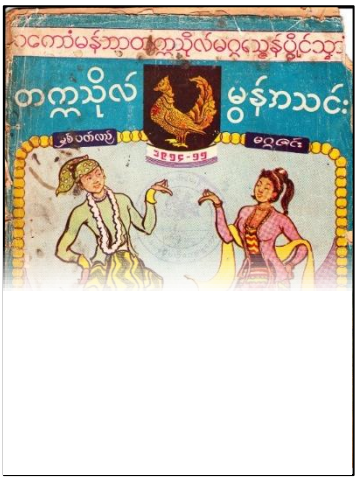
ャモン協会）[6]である［South 2003: 101］。ARMA（1939 年発足）は、1962 年クーデタの前まで、同国のモンのあいだでもっとも影響力のあった民間のモン文化団体である。政府と鋭く対立する政治組織ではない。また ARMA は、1950 年代、政府と交渉の末、公立小学校におけるモン語教育を実現しており、その教科書の一部の編纂にもかかわった［和田 2017: 189-190］。上述した 1957 年 6 月号からもわかるように、『モン通信』はこのモン語教育関連の記事を多く収録しており、独立後民政期における公的な少数言語教育の一端を知る資料として貴重である。ただし現物の多くは散逸している。

なお 1962 年クーデタ以降、この『モン通信』の廃刊とともに、時事情報を載せたモンの逐次刊行物は一度姿を消すことになった。その後、モンのニュース紙が息を吹き返すのは 1988 年以降になってからである。後述のように 1988 年以後はさまざまな少数民族の「エスニック・メディア」が活況を呈するが、モン社会にとってこの『モン通信』は後世のエスニック・メディアの先駆けであった。

『年刊モン大学生協会マガジン』

（University Mon Society Annual Magazine / M. ဂကော်မန်ဘာတက္ကသိုလ်မဂ္ဂဇွေန်ပ္ပိုင်သွှံ / B. တက္ကသိုလ်မွန်အသင်းနှစ်ပတ်လည်မဂ္ဂဇင်း）

1947-1948 年に結成したヤンゴン大学モン学生協会が発行する年刊誌（同誌初号 p.1）。現物を確認できたのは、1954-1955 年号（Vol.1, No.1）、1955-1956 年号（Vol.1, No.2）、1957-1958 年号（Vol.1, No.4）の 3 点。いずれもビルマ語記事（初号は全 112 頁）、モン語記事（同 32 頁）、英語記事（同 26 頁）が収録されたトリリンガル刊行物。評論、詩、小説などからなる文芸雑誌である。この次に訪れる社会主義時代には、政治的な影響もあり、こうした文芸雑誌の刊行が中心となるが、『年刊モン大学生協会マガジン』はその先駆的な存在である。



『年刊モン大学生協会マガジン』1954-55 年号（初号）の表紙。

2-2. 社会主義時代（1962-1988）

1962 年クーデタによって政権がかわると出版や表現の自由は大幅に制限された。その根拠は 1962 年印刷者出版者登録法である。同法にもとづいて印刷者と出版者は登録が義務付けられ、全ての刊行物は検閲局に提出しなければならなくなった［Allot 1993:

[6] All Ramannya Mon Association or All Ramonnya Mon Association / M. ဂကော်ဗော်သွေးမဉ်အလုံချုင်ရာမည / B. ရာမညတိုင်းလုံးဆိုင်ရာမွန်အသင်းကြီး or အဖွဲ့ချုပ်

5-8］。

また民政期にモン語逐次刊行物を発行していた ARMA とヤンゴン大学モン学生協会は、ほかの民族組織と同様、1962 年クーデタを機に解散させられたという［後述するナーイ・マウントー氏より］。

しかし 1962～1988 年の社会主義時代であっても、制限や困難のなか、政治的な内容を避け、文化に特化した中身であれば、少数民族にかんする出版や、少数言語による出版も認められてきた。その容認方法は主に２つ。検閲制度をとおして合法的に出版が認められる場合と、検閲を経ていない地下出版物が特定コミュニティのなかで配布されるのを当局に黙認される場合がある。いずれもミャンマー国内で刊行可能である［Soe Lynn Htwe2017: 12-13］。なお少数言語の刊行物が出版許可をえる際には、ビルマ語翻訳の提出が求められたため、ビルマ語の出版物よりも刊行の壁は高かったとされる［Smith 1994: 115］。これにより出版を躊躇したり、地下出版に流れることもあったようだ。例えば、ソーリントウェーの研究によれば、1980 年代後半、マンダレー大学シャン文芸文化協会が雑誌刊行を計画したとき、検閲時のビルマ語翻訳に協力したにもかかわらず検閲局からなかなか許可がおりなかったため、結局、地下出版に踏み切ったという［Soe Lynn Htwe 2017: 12-13］。

これらに加え、政治的な内容を含むといった理由からミャンマー国内では刊行の難しい地下出版物が、国境地域や少数民族武装勢力が実効支配する地域などで出版や頒布された。つまりこの時代は、合法、地下出版（国内黙認）、地下出版（国境地域）という 3 タイプの刊行形態があった。

この社会主義時代にもモン語の逐次刊行物は複数出版されている。そのなかで、とくに重要なものとして大学生グループのマガジンと、文芸文化委員会の雑誌の２つがある。これら双方とも年刊の文芸誌であり、検閲をとおして国内で合法的に出版されていたと思われる[7]。一方、時事情報をふくんだモン語の総合情報誌が国内で刊行された形跡はなさそうである。

なお「モン文芸文化委員会」は各都市に同名の団体があるが、別々の組織である。また同じ都市でも、大学生グループと、一般市民のグループは、異なる組織として活動している。名称が似通っているので注意されたい。

『大学モン・マガジン』（M. မဂ္ဂဗြေန်မန်တက္ကသိုလ် / B. တက္ကသိုလ်မွန်မဂ္ဂဇင်း）

モン人の大学生を中心とするグループが発行する年刊誌。発行者団体は、ヤンゴン諸大学モン文芸文化小委員会（B. ရန်ကုန်တက္ကသိုလ်များ မွန်စာပေနှင့်ယဉ်ကျေးမှုဆပ်ကော်မီတီ）（1972-1973 年号の序文より）。筆者が現物を確認できたのは、1970-1971 年、1971-

[7] 確証はないが、印刷者と出版者に番号が付されている刊行物については、本稿では合法的な出版とみなした。

1972 年、1972-1973 年の 3 号。1970-1971 年が初号か第 2 号の可能性がある[8]。合法的な刊行物として、ヤンゴンで出版・印刷されている（1970-1971 年号より）。1971-1972 年号、および 1972-1973 年号の発行部数はそれぞれ 4,000 冊。文芸雑誌であり、評論、詩、小説などが収録されている。

『大学モン・マガジン』
1970-71 年号の表紙。

いずれの巻号もバイリンガル構成で、1970-1971 年号は前半ビルマ語、後半モン語、1971-1972 年号と 1972-1973 年号は逆転し前半モン語、後半ビルマ語で書かれている。それぞれの分量は 65 頁～100 頁ほど。内容は言語ごと異なり、翻訳版が掲載されているわけではない。

当時の様子を知る貴重な記事もある。例えば民族衣装について。現在、モンの民族衣装といえば赤地を基調とした腰布が特徴的で、各種民族イベントではそろって同じ衣装をまとう。しかしこれはかつての日常的な伝統衣装ではなく、1971 年、大学生を中心とするグループがつくりだした新しい伝統である。この民族衣装の創作過程は『大学モン・マガジン』1971-1972 年号に収録されている。

発行団体である文芸文化小委員会については説明が必要だろう。以下は 1960 年代後半に文芸文化小委員会（モン）の会員だったナーイ・マウントー氏への聞き取り（2013 年）による[9]。発足のきっかけは 1964 年 2 月 12 日の連邦記念日。このときネーウィンが、原住民族の文化と伝統慣習にかんする活動については他者を傷つけないかぎり自由におこなうことができると演説したことで、民族活動が可能となった[10]。これをうけて翌年、大学関係者により「ヤンゴン諸大学原住民族文芸文化委員会」が結成され、その下部組織として、モン、カレン、シャン、ヤカイン、チン、カチン、カヤーそれぞれの「ヤンゴン諸大学〇〇文芸文化小委員会」が発足した。実際に組織活動をおこなったのは後者、民族ごとの「小委員会」である。それぞれの小委員会の長は大学教員がつき、書記とメンバーは大学生であった。結成当初、「ヤンゴン諸大学モン

---

8 『大学モン・マガジン』1971-1972 年号（ビルマ語 p.5）に「2 回目の大学モン・マガジンを発行した」とある。

9 ナーイ・マウントー氏は 1964～1965 年モーラミャイン・カレッジに学んだのち、1966～1967 年はヤンゴン大学に進学し 3～4 年次を同大学の学生としてすごした。ヤンゴン大学生のときに「ヤンゴン諸大学モン文芸文化小委員会」の会員であった。また 1972 年には大学外部の市民団体として「モン文芸文化委員会（ヤンゴン）」（B. မွန်စာပေနှင့်ယဉ်ကျေးမှုကော်မီတီ（ရန်ကုန်））が結成されるが、同氏はそこで書記も経験した。

10 刊行された同演説の内容は次の通り。「原住民族（タインインダー）がそれぞれおかれた状況のなかで自由に活動したいとき、自分たちが大切にしている言語、文芸、伝統、信仰する宗教、守るべき慣習を実践することはかまわない。ただしその実践が、連邦全体にとって欠かせない団結や統一を損なう可能性があれば、それは絶対に避けなければならない。他の原住民族や多数の人びとを傷つけたり虐げたりしないように、よく協議し和解したうえで、実践しなければならない」［မြန်မာ့ဆိုရှယ်လစ်လမ်းစဉ်ပါတီပါတီစည်းရုံးရေး 1964: 26］。

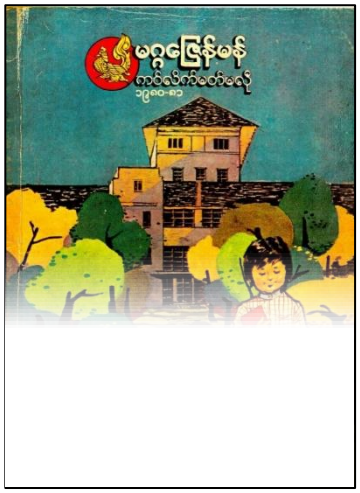
文芸文化小委員会」の活動は、大学生間での新入生歓迎会とモン文語教育であり、しばらくしてからカレンダーの作成や雑誌の発行をはじめた。その後、1970 年代になるとモーラミャインやマンダレーにも同様の団体が立ちあがる。

このうちモーラミャイン大学の団体は雑誌を刊行しているので以下確認しよう。

『モーラミャイン・カレッジ・モン・マガジン』

（M. မဂ္ဂဇြန်မန်ကဝ်လိက်မတ်မလို / B. မော်လမြိုင်ကောလိပ်မွန်မဂ္ဂဇင်း）

モーラミャイン大学の学生グループが発行する年刊誌。ただし実際は毎年発行されていない。発行者団体は、モーラミャイン・カレッジ・モン文芸文化小委員会（B. မော်လမြိုင်ကောလိပ် မွန်စာပေနှင့်ယဉ်ကျေးမှုဆပ်ကော်မီတီ）（1977-1978 年、Vol.4 の序文より）。



『モーラミャイン・カレッジ・モン・マガジン』1980-81 年号の表紙。

筆者が現物を確認できたのは、1977-1978 年（Vol.4）、1980-1981 年［Vol.6］の 2 点。評論、詩、小説が載る文芸雑誌。合法的な刊行物であり、両号とも印刷地はヤンゴン。1977-1978 年号は発行部数 3,000 冊、価格 6 チャット。1980-1981 年号は発行部数 5,000 冊、価格 8 チャット。このほか 1980 年 2 月に Vol.5 を 4,000 部発行したと翌号（1980-1981 年号）に説明がある（ビルマ語 p.11）。

前半モン語、後半ビルマ語で書かれたバイリンガル雑誌である。それぞれの言語の分量は 60 頁～90 頁ほど。

『モーラミャイン・ディグリーカレッジ・モン・マガジン』

（M. မဂ္ဂဇြန်မန် ဒီဂရီကဝ်လိခ်ချင်မတ်မလို / B. မော်လမြိုင်ဒီဂရီကောလိပ် မန်မဂ္ဂဇင်း）

発行者は、モーラミャイン・ディグリーカレッジ・モン文芸文化小委員会（B. မော်လမြိုင်ဒီဂရီကောလိပ် မွန်စာပေနှင့်ယဉ်ကျေးမှုဆပ်ကော်မီတီ）。筆者が現物を確認できたのは 1984-1985 年号の 1 点。モン語記事 112 頁、そのあとにビルマ語記事 56 頁がつづく。そのほか刊行状況などは不明。評論、詩、小説からなる文芸雑誌。

モーラミャイン大学は 1953 年に大学予科（Intermediate College）として創設後、1963 年に大学（College）、1977 年に地域大学（地域カレッジ）、1981 年に学位大学（Degree College）、1986 年に大学（University）へと順に格上げされた[11]。この移行にそって、上述の『モーラミャイン・カレッジ・モン・マガジン』が名称変更したのがこの雑誌で

[11] モーラミャイン大学ウェブサイトより〈http://www.mlmuni.edu.mm/?page_id=2318&lang=my〉（ビルマ語）；〈http://www.mlmuni.edu.mm/?page_id=1940&lang=en〉（英語）（2023 年 3 月 31 日閲覧）。

はないかと思われる。

これら『モーラミャイン・カレッジ・モン・マガジン』と『モーラミャイン・ディグリーカレッジ・モン・マガジン』はモンの文化や歴史などにかんする記事を中心に掲載している。これとは別に、大学関係者が発行する大学マガジンがあり、それらはモンの民族活動とは関係がない[12]。名称が似るものの、両者は内容や発行者においてまったく異なるため注意が必要だ。

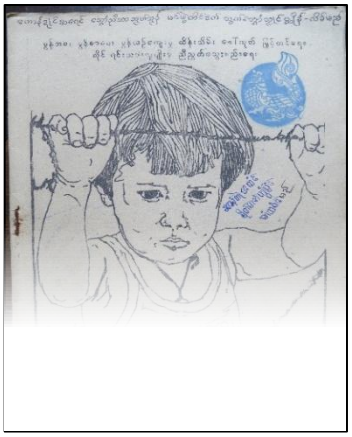
『ライェモン（モンの光）』（M. လိခ်ၚင် လျးမည်)

イエジン諸大学文芸文化小委員会が発行する文芸雑誌。筆者が現物を確認できたのは、1984 年号（Vol.6）。15 頁ほどの小冊子。モン語とビルマ語の 2 言語で書かれる。既述の刊行物はすべて印字だが、この『モンの光』は手書きで書かれている。同誌をはじめ、このあととりあげる手書き冊子『金のハンサ鳥』『ラモンの声』『新時代』『知恵の光』は、すべて出版許可をとっていない内輪での印刷物と思われる。

なお既出の『モーラミャイン大学モン・マガジン』1980-1981 年（ビルマ語 p.14）には、モーラミャイン・カレッジ・モン文芸文化小委員会の 1980-1981 年活動記録として、「イエジン農業大学モン文芸文化小委員会発行『モンの光』（Vol.1）の配布支援」と書かれている。当時、大学をまたいだモン学生間の交流があったこと、そして『モンの光』が年に 1 回以上作成されていたことがうかがえる。

『ボップトー（金のハンサ鳥）』（M. လိခ်ၚင်ဗုိပ်ထပ် / B. ရှ ဟသ်ာစာစဉ်)

ヤンゴン諸大学モン文芸文化委員会が発行する手書きの小冊子。モン語とビルマ語の評論などが収録された文芸雑誌。確認できた現物は、1978 年 2 月号（Vol.2, No.1）、年不明（Vol.3, No.1）、1980 年（巻号不明）、1981 年（巻号不明）、1982 年 2 月号（Vol.6, No.1）、1982 年 11 月号（Vol.6, No.2）。1982 年 11 月号は、発行部数 500 冊、出版地ヤンゴン。ほか、第 36 回モン民族記念日特別号がある（1983 年ごろか）。



『金のハンサ鳥』1980 年号の表紙。

なおタイトルにある「ボップ」（ハンサ鳥）とはインド

[12] 筆者が確認できたものとして、例えば『年刊モン州地域カレッジ・マガジン』（B. မွန်ပြည်နယ်ဒေသကောလိပ် နှစ်လည်မဂ္ဂဇင်း）1981 年号、『年刊モーラミャイン・ディグリーカレッジ・マガジン』（B. မော်လမြိုင်ဒီဂရီကောလိပ်မဂ္ဂဇင်း or မော်လမြိုင်ဒီဂရီကောလိပ် နှစ်လည်မဂ္ဂဇင်း）1982 年号（創刊）、『モーラミャイン大学マガジン』（Mawlamyine University Magazine / B. မော်လမြိုင်သက္ကသိုလ်မဂ္ဂဇင်း）1995-1996 年号、2004-2005 年号、2009-2010 年号（後者 2 つはタイトルに「年刊」の語が追加）など。基本的に記事はすべてビルマ語で書かれ、一部は英語記事も収録する。モン語記事はない。

起源の想像上の鳥のこと。サンスクリットやパーリ的な表現だとモン語でホンサー（B.ヒンダー／T.ホン）と呼ぶ。現在はモン民族のシンボルとして頻用されており、武装組織の党旗、民族記念日の旗、文化団体のエンブレムや報道機関のロゴデザインなどをはじめ、本稿でとりあげる逐次刊行物の表紙の多くにも登場する。

『ラモンの声』（M. ရမျာင် ရမဉ် / B. ရမဉ် စာစဉ်）

モーラミャイン・カレッジ・モン文芸文化委員会が発行の手書き小冊子。モン語とビルマ語の評論などが収録された文芸雑誌。確認できた現物は 1978 年 6 月号（Vol.2, No.3）と、1979 年 8 月号（Vol.3, No.2）。ともに発行部数 500 冊。ほかモン民族記念日特別号あり。

『ケッタモイ（新時代）』（M. လိခ် လျင်ခေတ်တို)

ヤンゴン青年僧モン文芸文化委員会発行の手書き小冊子。全てモン語評論の文芸雑誌。確認できた現物は、小暦 1342 年号［1980 年］（No.8）、発行部数 750 冊。

『ライェポンニャー（知恵の光）』（M. လျှးပညာ)

ヤンゴンのモン僧の団体、ウォンサカラヤーナが発行する手書き小冊子。全てモン語評論の文芸雑誌。確認できた現物は、1985 年 9 月 25 日発行の号。

大学生が制作する『金のハンサ鳥』『ラモンの声』はバイリンガル雑誌であるのにたいし、モンの仏教僧が発行者である『新時代』『知恵の光』はモン語のモノリンガル雑誌であるのが特徴的。これは僧院教育をうけたモン僧には、ビルマ語よりモン語を得意とする者が多いことが背景にあると考えられる。

『モン・マガジン』（M. မန်မဂ္ဂဇြန် / B. မွန်မဂ္ဂဇင်း）

モン文芸文化委員会（ヤンゴン）（B. မွန်စာပေနှင့်ယဉ်ကျေးမှုကော်မီတီ（ရန်ကုန်））が発行する文芸雑誌。筆者が確認できたのは 1973 年 6 月（Vol.1）と 1976 年 1 月（Vol.2）の 2 点。合法的な出版物。この 2 点とも発行部数は 3,000 冊。印刷地はともにヤンゴン。前半モン語、後半ビルマ語からなるバイリンガル雑誌。各言語それぞれ 50～90 超頁の分量がある。

『モン・マガジン』1973 年号（初号）の表紙。

Vol.1 には発行者のモン文芸文化委員会が 1972 年 2 月 27 日、シュエダゴン仏塔南側にあるモン法堂にて結成され

たことが記録されている（ビルマ語 p.42-43）。

『ラウィーホンサー』（M. မဂ္ဂဇြန်လွှီဟံသာ）

上記雑誌の発行者と同じ、モン文芸文化委員会（ヤンゴン）（B. မွန်စာပေနှင့်ယဉ်ကျေးမှုကော်မီတီ（ရန်ကုန်））が発行する文芸雑誌。評論、詩、小説が載る。初号年不明。筆者が確認できたのは第 3 号（1981 年 9 月）、第 4 号（1987 年 8 月）、第 5 号（1995 年 2 月）、第 12 号（2018 年 7 月）。不定期だが、社会主義時代から軍政期をへて民政移管後まで 37 年以上の長期にわたって刊行されてきた息の長い雑誌である。合法的出版物。モン語とビルマ語の記事を掲載するバイリンガル雑誌。各言語 60～80 頁ほどの分量。

『ラウィーホンサー』1981 年号の表紙。

発行部数（および価格）はそれぞれ第 3 号 3,000 冊（10 チャット）、第 4 号 5,000 冊、第 5 号 2,000 冊、第 12 号 1,000 冊（2,500 チャット）。いずれも出版地はヤンゴン。

『モン州記念日記念誌』
（M. လိခ်စုတ်သမ္ဗီတဲ့ကိုရုးချင်မန် / B. မွန်ပြည်နယ်နေ့အထိမ်းအမှတ်စာစောင်）

行政区画であるモン州（Mon State）は、新憲法にもとづき 1974 年 1 月 3 日に新設された。「モン州記念日」は同州の設置を記念する行事であり、その記念誌としてこの雑誌は刊行されている。筆者が確認したのは 1975 年号と 1978 年号の 2 点。

モン州記念日は政府関係者が参加するイベントであり、民族団体が主体的におこなう他の行事とはやや趣が異なっているようにみえる。この記念誌の序文を執筆するのも、モン州人民評議会（地方政府）議長であり、政府との関係が密接である[13]。この雑誌は民間の民族団体主体の発行ではないという意味で、ほかと区別するために

『モン州記念日記念誌』1975 年号の表紙。

[13] モン民族運動として年間行事で最も普及し参加者が多いのは「モン民族記念日」（Mon National Day）である。こちらは民間主体で継続しておこなわれている。このモン民族記念日の雑誌（M. *လိခ်သ္ပသ္ဗီတဲ့ကောန်ဂကူမန်* / B. *မွန်အမျိုးသားနေ့ အထိမ်းအမှတ်စာစောင်*）として、1976 年、第 29 回開催記念誌を確認できる。ただし継続性など不明。

「民族雑誌」と呼ぶべきではないのかもしれない。

この記念誌もバイリンガル雑誌であるが、1975 年号は前半モン語（40 頁）、後半ビルマ語（50 頁）であるのにたいし、1978 年号は前半ビルマ語（130 頁）、後半モン語（40 頁）となりビルマ語優位の傾向がつよまった。

1978 年号によれば、モン州記念日記念誌・ポストカード発行委員会の書記（モーラミャイン市在住）が同誌の出版者。発行部数 3,500 冊、価格 5 チャット。

2-3. 軍政期（1988 年～）、民政期（2011 年～）、軍政期（2021 年～）

1988 年政変後、とくに政治的な内容について検閲は強化された。多くの著述家やジャーナリストが逮捕・投獄され、表現の自由は後退した。モンの記者（仏教僧含む）も複数名が捕まっている。

これが 180 度転換し、出版や言論の自由が大幅に前進した契機が、2011 年の民政移管である。2012 年 8 月には検閲局が閉鎖され、半世紀にわたって情報統制の要を担った検閲制度がおわりを告げた。2013 年 4 月、これまで国営紙にかぎられていた日刊紙の刊行許可が民間にも発行されるようになるとともに 26 紙もの民間日刊紙が世に出る［Brooten, McElhone and Venkiteswaran 2019: 37］。創刊された週刊誌や月刊誌は数え切れない。民政移管によってミャンマーの出版環境は一新し、出版ブームに沸いた。2017 年の報告によれば、885 以上の刊行物に政府の出版許可が下り、そのうち 50 紙/誌が少数民族語で書かれた出版物である［Irrawaddy, 2017/6/10］。その後、2021 年 2 月の政変以後は、複数の主要メディアがライセンスを剥奪され、再び情報統制が厳しくなる[14]。

このように 2021 年 2 月より前の出版環境は、1988 年以降の統制と、2011 年後の自由化というように対照的に語られる。しかしこれはあくまで国内一般の説明にすぎない。周辺国や国境地域に目をむければ、むしろ国内で言論弾圧の厳しかった 1990 年代は、ミャンマーからこうした地域に逃れた活動家たちがいくつもの民間メディアを立ち上げ、活発に活動を始めた時期であった。これらは「亡命メディア」（exiled media）、「抵抗メディア」（opposition media）、「独立メディア」（independent media）などと呼ばれ、2011 年以前から国内では報道できないような政治や社会の実情を伝えてきた貴重な媒体であり、その一部は現在でも刊行をつづけている。1990 年代から拡大した理由として、その背景には米国国務省や米国国際開発局（USAID）など海外からの支援がある。こうした海外ドナーは、多額の金銭支援とともに、中立的かつ客観的な報道をおこな

[14] 例えばチン州にあった 16 の通信社のうち 10 社が業務を停止したという［BNI, 2023/1/6］。

うための訓練を推進し、亡命メディアにおけるジャーナリズムの質的向上を促した［Brooten 2006: 361］。

これら亡命メディアには「エスニック・メディア」の一部が含まれる。エスニック・メディアは、特定の少数民族にかんする情報発信に注力した媒体であり、新聞やネットニュース、近年ではネットでの動画ニュース配信なども行っている。上記のように海外ドナーから支援と訓練をうけるため、武装勢力のプロパガンダではなく、中立的な報道を目指す場合が多い[15]。使用言語は少数民族や媒体ごとにさまざまであり、例えば *Hsen Pai* はシャン語のみの隔週刊紙、Karen News はカレン語版とビルマ語版の新聞を発行するのにたいし[16]、カヤー（カレンニー）の Kantarawaddy Times やチンの Chin World は民族内部の言語多様性を考慮して共通言語のビルマ語で新聞を発行しているようだ［Soe Lynn Htwe 2017: 6-10］。こうしたエスニック・メディアは、自民族のためだけでなく、ほかのメディアが取材活動をなかなか行えないような少数民族地域にも入り込み、そこの人権問題や政治・社会状況を国際社会等にむけて発信するという重要な役割も担ってきた［Soe Lynn Htwe 2017: 18］。モンの場合は、独立モン通信社（IMNA）および『フノンタイン』紙がこうした亡命エスニック・メディアの代表である。

亡命メディアの一部は、国際ビルマ・ニュース（BNI）というネットワークを 2003 年に組織し、エスニック・メディアとそうではない一般的な通信社とが相互交流と協力関係を築く場のひとつを提供してきた。BNI は今も存続し、現在は 15 のメディアが参加する。独立モン通信社（IMNA）も加盟している[17]。

亡命エスニック・メディアの多くは、2011 年以降、出版者ライセンスを獲得し、ミャンマー国内での合法的な出版活動を始めた。メディアの受信者に焦点をあてた調査によると、少数民族の人びと（モン、カレン、カヤー）はこうしたエスニック・メディアを選好する一定の傾向がみられるという。とくにモンとカヤーのあいだでは、それぞれ独立モン通信社（IMNA）と Kanthayawaddy Times への信頼度が相対的に高いようだ［Aye Lei Tun and Lehmann-Jacobsen 2020: 14-15］。

一方、2011 年以降の変化はチャンスとともに新たな困難も呼び込んだ。主な課題は以下３つある。まず、市場競争のなかに投げ込まれ、資金調達の問題がより深刻化した。つまり、出版自由化に伴い多くの新聞が創刊されて競合が激しくなった。例えば、55 の地方通信社（40 が特定民族を対象とするメディア、15 が特定地方をとりあげるメディア）を列挙した MDIF の調査によれば、55 社のうち 38 社が 2011 年以降に開設し

[15] 例えば Kachin News Group（ウェブニュース）や *Chin World Weekly* は、自民族の政治主導者にたいする批判もおこなってきた［Fox, Helbardt, Hahn and Krebs 2023: 48-49］。

[16] Karen News ウェブサイト〈https://karennews.org/about-us/〉（2023 年 3 月 23 日閲覧）。

[17] BNI ウェブサイト〈https://www.bnionline.net/en/about-bni〉（2023 年 3 月 23 日閲覧）。BNI 創設時からのメンバーであるロヒンギャのメディアがその後 BNI から排除されていった経緯については McElhone 2019 を参照。

た新参者である［McElhone 2018: 10］。また、広告料をえる印刷物は収入源として依然重要だが、エスニック・メディアの読者層は限定されており、いまだ資金源をドナーに頼る持続可能ではない構造から脱却できてはいない。第二に、ネット利用が増加し、新聞や雑誌の需要が減少した結果、紙媒体の存続がより困難になった[18]。第三に、2011 年から 2021 年 1 月までの民政期であっても、通信社やジャーナリストにたいする政府や市民からの圧力はなくならず、とくに NLD 政権下に言論の自由は後退したといわれる［Brooten, McElhone and Venkiteswaran 2019: 37-43; McElhone 2019: 216-220］[19]。

以下本節では、1988 年以降に活発化したモンの民間メディアについてまずとりあげる。後述のように、こうしたエスニック・メディアは独立モン通信社に代表される亡命メディアだけではない。黙認されてきた国内地下出版の新聞もある（『アマーッテイン』紙）。またモンの民族や地域に関係のある 2011 年以降の新興メディアにも触れたい。加えて、これら時事情報を掲載する新聞だけでなく、文芸雑誌にも注目したい。1988 年以降、モンの逐次刊行物全体としては、たしかに時事情報をあつかう新聞の存在感が増していくが、その一方、前の時代からあった文芸雑誌もまた、そのジャンルとしての継続性という意味で注目すべきだろう。

2-3-1. 新聞

現在も紙媒体で発行されている新聞として『フノンタイン』と『アマーッテイン』の 2 紙、かつて紙媒体で発行していた新聞に『タンルウィンタイム』がある。『フノンタイン』紙が亡命エスニック・メディアであるのにたいし、『アマーッテイン』紙は軍政時代に地下出版が黙認されていたケースである。また『フノンタイン』と『アマーッテイン』の 2 紙が 2011 年より前から発行をつづけるエスニック・メディア（民族新聞）であるのにたいして、『タンルウィンタイム』は 2011 年以降に創刊された新興の「地方紙」として位置付けられる。

『フノンタイン』紙（M. သွင်တိုင် / Guiding Star）

創刊 1999 年 9 月 9 日の『フノンタイン』紙は、現在まで 20 年以上にわたり継続刊行している紙媒体のモン語新聞である[20]。かつては 1 頁 A3 サイズ、2014 年 1 月から 390mm×270mm サイズに縮小した。

---

[18] モン、カレン、カヤーの 3 民族にたいする調査では、ニュースの情報源として何を好むかという質問にたいして、25%が TV、25%がソーシャルメディア（Facebook など）、20%が友人や親族と答えたのにたいし、新聞紙を選んだのはわずか 8%である。新聞を毎日読む習慣のある人はわずかしかいないようだ［Aye Lei Tun and Lehmann-Jacobsen 2020: 9-10］。

[19] エスニック・メディアの抱える問題は、ほか Soe Lynn Htwe［2017: 21-23］および Fox, Helbardt, Hahn and Krebs［2023: 49-50］を参照。

[20] 紙名の「フノンタイン」は北極星の意味。なお「フノンタイン」は口語的発音であり、文語的には「サノンタイン」となる。そのため英語の記事・論稿では “Snong Tine”［South 2003: 285］ や ”Sanong Taing” などと表記される。

創刊当初はタイ国のモン人による支援のもとバンコクで印刷し、それをタイとミャンマーの国境地域などで配布していた。当時の発行部数は500部、モノクロの8面構成。2002年には頁数を12面構成へと拡大するが、これはNGOから資金援助を受けて可能になった。

2008年から印刷地をミャンマー国内モン州に移し地下出版を始める。なお編集や配布には一部のモン仏教僧による協力もあった[21]。

『フノンタイン』紙 PDF 版（2014年3月1日号）表紙。

もともと『フノンタイン』紙の発行者は、後述する独立モン通信社（IMNA）であった[22]。IMNA の創設者はモン民族のナーイ・カサオモン氏（Nai Kasauh Mon）である。氏は大学生のとき 1988 年の民主化デモに関わったあと、タイとの国境地域に逃れた。後述する HURFOM の設立者でもある[23]。なお現在は政治的な理由により、『フノンタイン』紙と IMNA は建前上、別組織として活動している［同紙関係者より］。

当時は非合法刊行であった 2008 年の現物（No.107、7 月号）が手許にあるので簡単に紹介しておこう。16 面構成で、表紙と裏表紙はカラー印刷。自民族にかんする情報に重きをおいた一般紙であり、地域面（モン民族集住地域）を中心に、国内（ミャンマー国内と一部タイ）、オピニオン、経済・健康、国際、スポーツ、娯楽、文化の各紙面からなる。こうした一般紙としての性格は現在まで変わらない。当時の特徴として特記すべきは、モン語だけでなくビルマ語記事をふくんでいる点である。全 16 面のうち 12 面（75%）がモン語、4 面（25%）がビルマ語記事であり、その内容の一部は重複している。

このようにタイや国境地域を拠点としつつ、ミャンマーで非合法に出版・配布されてきた同紙であるが、民政移管による 2011 年以降の出版自由化の流れのなかで、合法的な出版へと転換した。すなわち、2013 年から民間日刊紙の発行が半世紀ぶりに許可されたのと同時に、少数言語の新聞発行も可能となり、このとき『フノンタイン』紙も同年 4 月号から正式の許可をえてミャンマー国内で合法的に発行を開始した[24]。この合法化と同時に巻号を改めている[25]。

合法化によって一時、発行規模は拡大した。合法化直前の発行部数は 1,000 部または 1,500 部であったが、出版許可取得後、徐々に増刷し、2014 年 3 月の発行部数は 3,000

[21] 以上、創刊から 10 年間の経緯は［Irrawaddy, 2019/11/29］より。
[22] IMNA ウェブサイト〈https://monnews.org/about/〉（2023 年 3 月 23 日閲覧）。
[23] Webinar “The Myanmar Crisis Seen from the Border”,〈https://www.irasec.com/documents/files/Conf_Birmanie_decembre2021/Booklet_Myanmar_crisis_seen_from_the_borders.pdf〉（2023 年 3 月 11 日閲覧）。
[24] ミャンマー情報相が民間日刊紙の発行を自由化し、少数民族語新聞の発行ライセンス申請受付を 2013 年 2 月 1 日に開始すると発表したのは 2012 年 12 月 28 日［IMNA, 2013/2/21］。
[25] 合法化直前の 2013 年 3 月号は Vol.15, No.3。2013 年 4 月号は Vol.1, No.1。

部まで増えた。また、それまでは月刊誌であったが、2014 年に入って半月刊紙（月 2 回刊行）となった［関係者より］。この部数と刊行頻度の増加をかけあわせれば実質 4〜6 倍の発行拡大である。2017 年以降は読者の要望にそって一時的に毎週刊行の週刊紙となったが、2018 年 5 月から再び半月刊誌に戻り現在にいたる。需要や販売数は増えたものの、遠方への配達や集金の遅れにより短期コストが増し、週刊紙化は経営圧迫となったようだ［Santoso 2018: 43］。

また 2012 年頃から現在まで記事は全てモン語で書かれるようになった［関係者より］。民政期の出版ブームのなか、『フノンタイン』紙はモン語による新聞として、他紙との住み分けをしつつ、民族語促進運動の一環としての性格をつよめたといえよう。

またこの合法化とともに、同紙は、これまでの国境地域の事務所（タイ国カーンチャナブリー県サンクラブリー）にくわえ、ミャンマー国内のモン州都モーラミャインにも事務所を開所した。モーラミャイン事務所は 2023 年現在も活動している［関係者より］。

発行部数は一時、約 5,000 部に至ったが（2014 年）、その後、減少し、2019 年には約 1,200 部まで落ち込んだ。この理由について同紙創始者であり主筆のナーイ・カサオモン氏は、スマホでニュースをみる者が多くなり、新聞購入者が減ったためと述べている［Irrawaddy, 2019/11/29］。2023 年 2 月時点での発行部数は 1,000 部超である［関係者より］。刊行規模の点では 2021 年政変よりも、ネット普及のほうが影響は大きいようだ。

販売価格について。地下出版のときは無償配布していた［IMNA, 2013/2/21］。2013 年 4 月の合法化以降は 500 チャットで販売されるようになった。2022 年 9 月 16 日号（Vol.10, No.18）からは 1,000 チャットに値上げされている。

販売方法について。契約販売が基本であり、店舗での販売はごく一部のみ。また、モン民族学校[26]への無償提供などもおこなっている［関係者より］。同紙を支援する機関のひとつ MDIF のインドネシア人指導員が、経営上のドナー依存度が大きい独立モン通信社（当時の『フノンタイン』紙発行者）にたいして、数百部におよぶ学校への無償配布をもう少し削減してはどうかと提案したこともあるが、これは明確に拒否された。同紙の目的はビジネスではなく、モン語の保全など公共の利益に資するためというのが、譲れぬ理由であるようだ［Santoso 2018: 44］。

現在、同紙は Facebook ページ（モン語）を開設している[27]。フォロワーは 68, 141 人（2023 年 3 月 31 日現在）。Facebook ではニュースや情報を発信するとともに、『フノンタイン』紙の過去号 PDF 版を部分的に流している。2023 年 3 月 1 日にはこの Facebook 上で海外在住者向けの PDF 版販売（E メール）案内が配信されており、今後は年間契

[26] モン民族学校は、NMSP に近い教育団体が運営しモン語とビルマ語のバイリンガル教育バイリテラシー教育を成功させている。詳細は和田［2016: 40-43］参照。

[27] 〈https://www.facebook.com/guidingstarjournal/〉ページ開設は 2010 年 4 月 27 日。

約による電子版の購入が可能となりそうだ。

以上が『フノンタイン紙』の出版概要であるが、記事の中身はどうか。とくにモンの武装組織である NMSP（New Mon State Party：新モン国党）[28]との距離は気になるところだ。海外から資金支援とジャーナリズム訓練を受ける亡命メディアとして、『フノンタイン』紙も他紙同様、中立的で客観的な報道を目指している。しかし、ブルートンの指摘するように、こうした亡命メディアのスタッフが情勢の不安的な少数民族地域で身の安全を確保しつつ取材活動をつづけるためには、現実問題としてさまざまな制約があり、武装組織との関係を悪化させないための妥協も必要となる。実際、『フノンタイン』紙は、その報道内容によって NMSP 指導層の怒りを買い、一度は彼らの実効支配地域での頒布ができなくなったことがあるという。武装勢力との関係悪化は、特定地域の人権問題が明るみにならないといった懸念をうむ。同紙は取材と報道をまず優先し、武装勢力などへの批判は控えめにしてきたようだ［Brooten 2006: 364］。これは軍政期の話であるが、民政期を挟み、2021 年政変以降の現在はどのような報道をしているのか。以下、2022 年の年間をとおして 1 面トップにどのような記事が選ばれたか整理し、そこから同紙が何を情報発信として重視し、何に配慮しているのか、簡単に考察したい。これは地方紙とは異なる「民族新聞」としての特徴を明らかにするうえでも役に立つだろうと思われる[29]。

トップニュースを一覧にして並べてみると NMSP 関連の記事が多いことがまず目にとまる（表 1 参照）。第 13 号、16 号、17 号は NMSP やその党首の意見を載せており、「モン革命記念日」（第 15 号）は NMSP と関係の深いイベントである。ほか「モン青少年デー」（第 23 号）、「モン女性デー」（第 6 号）、「モン民族学校」（第 10 号）は、NMSP と独立しているものの、NMSP に近い活動や組織と考えられる。さらに「モン民族大会」（第 8 号、11 号）の中心的な主催者は NMSP と政党 MUP（Mon Unity Party）の 2 組織のようである。

なぜ NMSP 関連のトップ記事が多いのか。ひとつはおそらく他紙との差異化だと思われる。また 2021 年政変以後、民主化勢力寄りの記事がタブー視されるなか、少数民族武装勢力の動向をあつかう同紙は、ときにやや際どい政治批判を掲載しても今のところ刊行できており、合法的に活動をつづけるうえでの戦略ともいえる。1988 年以降、国軍、民主化勢力、少数民族運動という三角関係の構図は大きく変わっておらず、2021 年政変後は国軍が少数民族武装勢力に接近しようとする動きもある。同紙としてはジャーナリズムの中立性を保ちつつ、合法的に報道可能な範囲で、少なくとも 2022

[28] 結成 1958 年。1995 年ミャンマー国軍と停戦協定を結ぶ。現在の第 5 代党首はナーイ・ホンサー氏。Myanmar Peace Monitor によれば軍人数 800 超、予備役数約 2,000〈https://mmpeacemonitor.org/en/1570/nmsp/（2023 年 3 月 28 日閲覧）〉。

[29] 今回は『フノンタイン』紙の公式 Facebook にある新聞の PDF 版または 1 面の写真を分析対象とした。新聞全体を閲覧可能な PDF 版は全 24 号のうち 15 号分、残り 8 号分は表紙 1 面のみ確認できた。第 20 号（10 月 16 日発行）は 1 面もふくめ未確認のため分析の対象外とした。

年は武装勢力やその周辺の動向を発信することに力を入れてきたようである。

もう 1 点、かつてブルートンが指摘した亡命系エスニック・メディアにおける「団結」精神が、2021 年政変を経た現在も引き継がれていることがわかる。ジャーナリズムは多様な意見や立場を取り上げ、なるべく中立的な報道を心がけたり、権力の監視をしたりといった重要な役割を担っている。しかしそのためには民主主義的な法治国家において、身の安全がある程度保証されていることが前提になるだろう。他方、情勢が不安定で取材活動の困難な少数民族地域などでは、社会におけるさまざまな立場や見解の違いを浮き彫りにするのではなく、意見の対立について書くことを避けようとする姿勢が報道スタイルに現れる。ブルートンの研究によれば、「抵抗メディアのスタッフの多くは、現在の状況下で、言論の自由や完全な独立性を求めることは時期尚早だと述べた。彼らいわく、派閥主義（factionalism）のはびこる運動の歴史や苦労を考えれば、今は団結を妨害するよりも、反論や批判を避け、派閥主義を抑制し平和を維持することが必要である」［Brooten 2006: 366］。

『フノンタイン』紙のトップ記事もまた、民族団結のメッセージを伝えている。NMSP とは別の運動として例えば、第 12 号「モン語教育団体」がある。この団体は全モン文芸仏教文化教育協会のことである。出家在家混合の同協会は、仏教僧の広範なネットワークを主な後ろ盾としながら、子どもたちにたいするモン語夏期講習を、地域をこえて束ね統一してきた、有力な民族教育団体である。第 2 号と 21 号の「モン民族記念日」もまた、NMSP だけでなく、各地域の多様な主体が開催するイベントであり、モン民族団結のシンボル的な年間行事である。

こうした民族団結のメッセージは、ほかの報道と比べてみればわかりやすい。特定民族の報道に偏らない亡命メディアの *Irrawaddy* 紙と簡単に比較してみよう。2022 年、NMSP 幹部は 5 月と 10 月の 2 回、現軍政との会談を行って賛否を呼んだ。*Irrawaddy* 紙はこの会談に着目し、モンの民族内部は、親軍政勢力（NUP など）、軍政との停戦支持勢力（NMSP など）、反軍政勢力という 3 つの党派に分裂していると説明する。一方、『フノンタイン』紙はこうしたさまざまな意見対立があることをトップ記事としてはとりあげなかった。NMSP 幹部と軍政トップが握手する対談時の写真を 1 面に選ぶことも避けた[30]。筆者の感覚では、民族内部の目立った意見対立はゴシップとして広まりやすく、すでに人びとの間で話題になっていることが多い。『フノンタイン』紙はそうした対立関係をあえてトップ記事にはせず、かつてブルートンが指摘した「団結」の強調を現在も繰り返していることがうかがえる。

[30] 同年 6 月 16 日号は第 1 面ではなく第 8 面に、この会談にかんする個人の評論を載せる。同評論は、この会談を交渉の機会の 1 つととらえる武装勢力の戦略に私たちは口を出すべきではなく、安易に賛成や反対を示すより、ここは見守るのがよいとするなど、NMSP に寄り添う見解を示している。フェデラリズムの希求など、少数民族の意識は孔雀たちとは違うのだとも書いており、民主化勢力による NMSP 批判を牽制している箇所もある。いずれにせよ賛否ありうる内容であり、これをトップ記事に選ばなかったのは、対立よりも団結を優先する同紙の戦略ではなかろうか。

表１：『フノンタイン』紙トップ記事の内容一覧（2022 年度 vol.10）

No.	発行月日	一面トップ記事の内容（見出しタイトルではない）	特徴	PDF 版
1	1/1	モン語図書館を保護継承すべき	意見	―
2	1/16	モン民族記念日（2/16）中央式典の会場変更	予告	○
3	2/1	モン青少年会議での決議		―
4	2/16	Covid-19 感染再拡大と注意喚起		―
5	3/1	燃料費価格の高騰と自動車運送会社の困難		○
6	3/16	モン女性デーにて権力者への批判声明発表	意見紹介	○
7	4/1	モン語話者減少の村でモン語会話教師求む	意見紹介	○
8	4/16	モン民族大会を NMSP 先導で開催（5/2-5/5）	予告	○
9	5/1	モン州で政府仏教試験実施（4/30-5/13）	予告	○
10	5/16	モン民族学校関係者が民族カレッジ創設を提言	意見紹介	○
11	6/1	モン民族大会（5/2-5/5）決議の遂行委員選出		○
12	6/16	モン語教育団体書記が少数語教育統括組織を提言	意見紹介	○
13	7/1	国軍への軍事協力報道を NMSP が否定		○
14	7/16	モン碑文学者がモン王宮再建を先導僧に進言	意見紹介	○
15	8/1	第 75 回モン革命記念日（8 月 11 日）の縮小開催	予告	○
16	8/16	PPST の枠組みを今後も支持すると NMSP が声明	意見紹介	○
17	9/1	モン軍結成記念式典での NMSP 党首メッセージ	意見紹介	○
18	9/16	モン文芸関連諸団体がモン語辞書の電子化を提言	意見紹介	○
19	10/1	モン政治学者がモン政治諸団体間の対話を重視	意見紹介	―
20	10/16	―	―	―
21	[11]/1	来年のモン民族記念日（中央会場）実行委員結成	予告	―
22	11/16	次回モン詩人の日についてモン人作家の発言	予告	―
23	12/1	次回モン青少年デー（12/28）は屋外開催	予告	―
24	12/16	モン作家協会が仏教関連書籍の作成予定	予告	―

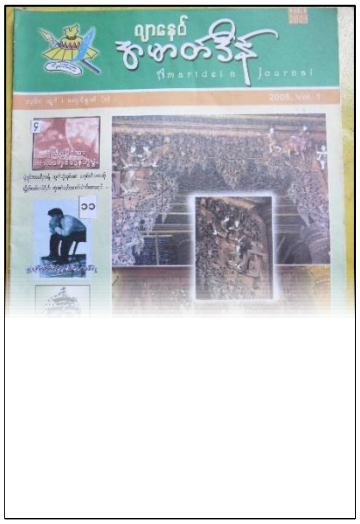
『アマーッテイン』紙（M. ဂျာဇနှစ် အမာတ်ဒဏ် / Amartdein Journal）

もうひとつのモン語新聞はヤンゴンを拠点とする『アマーッテイン』紙である。通常の新聞より小さい 390mm×270mm サイズ。創刊は 2005 年 11 月、当初は無許可で発行していた。政府はそれを認識していたが内容を確認したうえで見逃していたという。つまり亡命メディアや合法出版とは異なる、黙認された地下出版としてのエスニック・メディアとして活動していた［関係者より］［創刊月については IMNA, 2021/11/3］。

その後、『アマーッテイン』紙は、出版自由化のタイミングで、2013 年 3 月号から出版許可をえる［関係者より］[31]。2008～2011 年の間は年 3 回、2012～2014 年は年 4 回刊

[31] 合法出版になってから巻号を改めている。地下出版の最後は 2012 年 12 月号（Vol.21）、合法出版のはじ

行。2013 年 9 月号の時点で発行部数 2,000 部、500 チャット（現物より）。モン僧院の支援をうけヤンゴン市内にも活動拠点がある。現在は月刊紙として月 1 回の頻度で刊行している［IMNA, 2021/11/3］。



『アマーッテイン』紙 2005 年創刊号の表紙。

内容はモン民族にかんする時事情報や評論を中心に、テクノロジーや健康にかんする記事、民族とは関係のない評論などをふくむ一般紙である。最近のものが入手できていないので、遡って 2014 年 3 月号（Vol.5）を例としてとりあげてみたい（同号は発行部数 2,000 部、価格 500 チャット）。表紙と第 5 面は同年 3～4 月に行われる国勢調査にてモンの民族割当番号が 601 番であることを強調している。地方政府の民族代表大臣選出には一定数の当該民族人口が必要なため、とくにヤンゴンではなるべく多くのモン人口が列挙されるよう、当時モンの団体が運動を行っていた。ほか国内民族関連では、諸武装勢力と政府との和平交渉にかんするニュース、連邦制（フェデラル）や武装組織をめぐる評論、公教育と民族についての評論、モンの歴史概説などが載る。モン語の使用拡大のために、モンの商店はモン語の店名を掲げようと訴える記事もある。団結の重要性（背景にはモン政治の派閥化）や、時間の価値といった、より一般的な評論もある。国際ニュースは同年 2 月のウクライナ政変について（BBC 参照記事）。そのほか、曜日占い欄、癌や新型スマホなどにかんする記事も載る。しかし全体としては上述のような、国内の少数民族政治や、モン民族にかんする情報と評論が多くを占めるのが特徴である。

現在、『アマーッテイン』は Facebook（モン語）を開設している[32]。フォロワー数は約 1.5 万人（2023 年 3 月 31 日）。Facebook 上では表紙画像など紙面の一部を確認できるが、新聞全体を閲覧できる PDF 版は公開されていない。

『タンルウィンタイムズ』紙（B. သံလွင်တိုင်းမ် / Than Lwin Times）

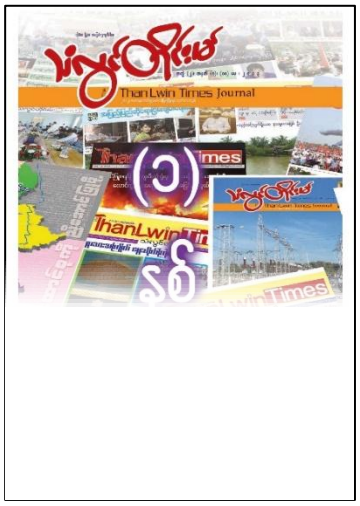
『タンルウィンタイムズ』はモン州都モーラミャインを中心とする月刊紙として 2012 年 5 月に創刊した。民族を前面にうちだす民族新聞ではなく、モン州を中心とした時事情報を載せる地方紙である。創刊直後の 5～7 月は月刊であり、2012 年 8 月（Vol.1, No.4）からは刊行頻度をふやして半月刊紙（月 2 回刊行）となった。創刊当初はビルマ語の記事だけであったが、2013 年 2 月 12 日号（Vol.2, No.3）からモン語の記事も部分的に掲載するようになる（同号は全 32 頁のうち 3 頁がモン語、残りがビルマ語）。その後、2015 年 8 月から 2017 年まではさらに慣行頻度を増やし、週刊紙として

めは 201[3]年 3 月（Vol.1；ただし 2012 年と誤記されている）。

[32] 〈https://www.facebook.com/Amartdein〉 ページ開設は 2013 年 6 月 12 日。

刊行されている[33]。

現在、紙媒体の『タンルウィンタイムズ』は発行されていない［MDIF, 2020/10］。紙発行をやめた理由は定かではないが、2014 年に資金難から定期的な発刊が滞っていたこともあり、もしかすると思うように収益をえられなかったのかもしれない［Soe Lynn Htwe 2017: 22］。かわりに同紙は現在、“Than Lwin Times Media” としてウェブニュースを英語、ビルマ語、モン語の三言語で配信している[34]。また『タンルウィンタイムズ』は Facebook でも報道配信をしており、そのビルマ語ページは 1, 108, 424 人のフォロワーがいる（2023 年 3 月 31 日現在）[35]。現在、『タンルウィンタイムズ』は国際ビルマ・ニュース（BNI）のメンバーである。



『タンルウィンタイムズ』
2013 年 4 月 10 日号の表紙
（発刊 1 周年記念）

『モン州議会報』（Mon State Hluttaw Journal / B. မွန်ပြည်နယ်လွှတ်တော်ဂျာနယ်）

ミャンマーの地方議会であるモン州議会が公的に発行する逐次刊行物。初号発行は 2017 年 1 月。ビルマ語による月刊誌である。創刊当時の他社の報道によれば、モン州議会の計画や、モン州にかんする情報、オピニオン欄や特集記事、マンガなどの掲載を予定しているという［IMNA, 2017/1/6］。その後の刊行状況は不明。

『ヒンダーニュース』（*Hinthar News*）

ヒンターメディアコーポレーション（သင်္သာမီဒီယာ）が紙媒体で発行する一般紙。

2016 年 12 月 12 日号（Vol.1, No.37）は、全 32 頁からなり、すべてビルマ語で書かれている。モン州各郡のニュースが多く掲載されているのが特徴である。隣のカレン州の面も 1 頁ある。ただし刊行の頻度、形態、現状などは不明。

『ヤーマニャ・ニュースジャーナル』（B. *ရာမညသတင်းဂျာနယ်*）

紙媒体の一般紙。2012 年 4 月号（Vol.1, No.4）は、すべてビルマ語。モン州のニュースを中心にとりあげた地方紙。同号は全 16 頁。刊行の頻度、形態、現状などは不明。

『モンの声ジャーナル』（M. *ဂျာနယ် ရမျာင်မန်* / Voice of Mon Journal）

他社の報道によれば、中央モン文芸文化委員会（M. ကမ္ဘတီလိုက်ပတ်ယေန်သွာင်မန် ဗဟို）

---

[33] Than Lwin Times ウェブサイト, “About us”〈https://thanlwintimes.com/about-us/〉（2023 年 3 月 5 日閲覧）。
[34] 英語〈https://thanlwintimes.com/〉；ビルマ語〈https://burmese.thanlwintimes.com/〉；モン語〈https://mon.thanlwintimes.com/〉（2023 年 3 月 5 日閲覧）。
[35] 〈https://www.facebook.com/thanlwintimes9/?ref=page_internal〉 ページ開設は 2012 年 7 月 7 日。

が 2011 年 10 月 16 日に初号発刊し（ただし PDF 版表紙の表記は 9 月号）、3 ヶ月に 1 回の発行を予定していた。第 2 号は同年 12 月の刊行を目指すという。発行部数 2,000 部、価格 500 チャット。モン地域の時事情報を中心に、健康、経済など総合的な内容。全 24 頁。全てモン語［IMNA, 2011/10/26］。ただし筆者は現物未確認。その後の継続についても不明。後述するタイ国で刊行されている類似タイトルの雑誌とは別物である。

2-3-2. ネット配信ニュース

『フノンタイン』紙がそうであるように紙媒体の新聞が発行部数を減らし、一方ではネット配信ニュースが存在感を増しているようだ。今は紙媒体の新聞も Facebook などのネット配信に積極的である。ここでは主要なネット配信ニュースについて簡単に整理する。なお、ネット配信に移行した『タンルウィンタイムズ』は前項で述べたとおりであり、ここでは取り上げない。

独立モン通信社（Independent Mon News Agency, IMNA / M. ဌာန်ပရိုင်ဗှားဝးမန် / B. လွတ်လပ်သော မွန်သတင်းအေဂျင်စီ）

かつて IMNA（1999 年設立）は『フノンタイン』紙の発行者であった。IMNA ネットニュースの一部記事は『フノンタイン』紙とまったく同じ内容であり、現在でも関係が深いことがうかがえる。ただし『フノンタイン』紙は合法であるのに対し、IMNA は非合法のため、両者は建前としては別組織として活動しているようである[36]。

IMNA のネット配信ニュースは英語、ビルマ語、モン語の三言語のページがある[37]。一部は同じ内容の翻訳だが、言語ごとの違いもある。例えば、著名なモン文筆家であり仏教僧の故パーリタ比丘の名前を検索すると、モン語記事がもっとも数が多く、それにつづいてビルマ語記事があり、英語記事は 2021 年にこの高僧が亡くなったことすら報道していない。言語ごとの読者にあわせて記事を選択しているのだろう。IMNA は Facebook もありモン語版は 293, 564 人のフォロワーがいる（2023 年 3 月 31 日現在）[38]。また IMNA は Youtube などを使ったネット上でのニュース配信もおこなっている[39]。なお IMNA は MNA と表記されることもある。

---

[36] Irrawaddy の報道によれば、IMNA はクーデタ後に非合法となった［Irrawaddy, 2022/12/9］

[37] 英語〈https://monnews.org/〉；ビルマ語〈https://burmese.monnews.org/〉；モン語〈https://mon.monnews.org/〉（2023 年 3 月 5 日閲覧）。

[38] モン語〈https://www.facebook.com/imnaburmese/?ref=page_internal〉、英語〈https://www.facebook.com/IMNAEnglish/〉。いずれもページ開設は 2011 年 9 月 30 日。

[39] Aye Lei Tun and Lehmann-Jacobsen 2020 は、IMNA、カレン情報局（KIC）、Kanthawaddy Times の 3 社がネットで発信するそれぞれモン語、カレン語、カヤー語の ELTV 放送（Ethnic Languages Televisions）について分析している。

モン国人権財団（Human Rights Foundation of Monland = HURFOM /M. ဂကော်ဒက်ပတန်အခေါင်အရာမ္ဘာ့ပ္ပဉ္ဇင်မန် /B. မွန်ပြည်လူ့အခွင့်အရေးဖောင်ဒေးရှင်း）

HURFOM は IMNA 創始者と同じナーイ・カサオモン氏によって 1995 年に設立された[40]。ビルマ（ミャンマー）国内の民主化、人権、平和の回復を目的に創設した組織である[41]。同団体は情報サイト Rehmonnya.org を運営し英語で発信している[42]。人権侵害の報道などに注力しているようだ。

HURFOM は『モンフォーラム』（**M. *လမျာင်ညးဍျင်မန် /B. မွန်လူထုအသံ / The Mon Forum***）というニュースレターを発行している。英語、ビルマ語、モン語の 3 言語それぞれの版がある。かつては月刊で定期刊行されていたようだが（例えば 2010 年の英語版）、2012 年ごろから不定期となり年に約 3～5 回の頻度で刊行されているようだ。また PDF 版はネット上で確認できるが、現在ハードコピーの印刷物として刊行されているかは未確認。『モンフォーラム』PDF 版は、新しい号の一部を上記 Rehmonnya.org のページや、HURFOM の Facebook で入手可能である[43]。また古い号はその一部を Online Burma/Myanmar Library のサイトからダウンロードできる[44]。

また、Rehmonnya.org のページからは以下 2 つの雑誌の PDF 版（一部）を閲覧可能。ひとつは『我らの時代』（**M. *ဂျာနော် ခေတ်ပို့/ Our Time***）。政治評論などが中心のモン語雑誌。ほかに同誌のウェブサイトがあり、そこから 2009 年 12 月（No.56）～2011 年 12 月（No.64）までの PDF 版が見れる[45]。同期間は季刊誌（3、6、9、12 月の年 4 回刊）。紙媒体の刊行有無などについては未確認。

もうひとつは『我らの権利』（**M. *ဂျာနော် အခေါင်ပို့ / Our Rights***）。女性にかんする評論を中心にとりあげたモン語雑誌。モン地域などで女性と子供の人権問題の監視やエンパワーメントと教育を行う団体 WCRP（Woman and Child Rights Project）が発行している。閲覧できる PDF は 2011 年 2 月号（No.16）。紙媒体の刊行や継続性などについては未確認。

カオワオ・ニュース（Kaowao Newsgroup / M. ဂကော်ပရိုင် ကဝ်）

2000 年代から 2010 年代初頭まで、このニュースサイトはよく知られていた[46]。創設

---

[40] Webinar “The Myanmar Crisis Seen from the Border”, 〈https://www.irasec.com/documents/files/Conf_Birmanie_decembre2021/Booklet_Myanmar_crisis_seen_from_the_borders.pdf〉（2023 年 3 月 11 日閲覧）。

[41] HURFOM ウェブサイト, “About us” 〈https://rehmonnya.org/about〉（2023 年 3 月 5 日閲覧）。

[42] 〈https://rehmonnya.org/〉

[43] HURFOM の Facebook 〈https://www.facebook.com/people/Rehmonnya-Human-Rights-Foundation-of-MonLand/100064824722972/〉。フォロワー数 9,805 人（2023 年 3 月 31 日現在）。

[44] 〈https://www.burmalibrary.org/en/category/discrimination-against-the-mon〉（2023 年 3 月 5 日閲覧）

[45] 〈https://monourtimejournal.blogspot.com/search/label/ကဗ်〉（2023 年 3 月 25 日閲覧）

[46] 〈https://www.burmalibrary.org/en/kao-wao-news-archive〉（2023 年 3 月 5 日閲覧）

は 2001 年［South 2003: 383(footnote 12)］。使用言語は英語、ビルマ語、モン語、タイ語の 4 言語。現在、同サイトはすでに閉鎖されている[47]。

2-3-3. 雑誌

エスニック・メディアだけでなく、文芸雑誌にも注意を向けたい。この時代のモン民族関連の雑誌もまた評論や詩をおさめた文芸雑誌が多い。ただし一部は時事情報を伝える雑誌もある。

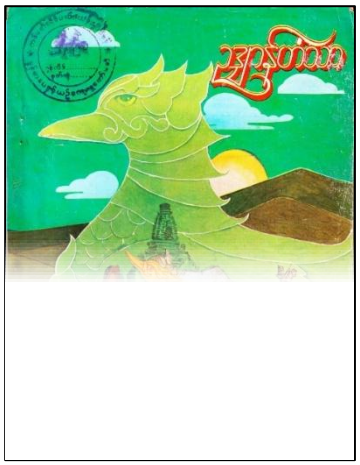
雑誌は出版形態によって大きく４つのグループに分けられる。（A）軍政期からの合法的刊行物。各地のモン文芸文化委員会が発行しているものが多い。（B）国内の閉じたネットワーク内で発行されていたため、おそらく軍政期から黙認されていたのであろう刊行物。仏教僧院の関与するものが多い。（C）国境地域や武装組織実行支配地域などで出回っていたと思われる刊行物。国内では自由に出版や配布ができなかった可能性が高い。近隣国以外の外国で発行された雑誌もある。（D）2011 年民政期以降、出版自由化のなかで発行された新興雑誌。

（A）軍政期から合法出版と思われる雑誌

『ウチャーン・ホンサー（ハンサ鳥の園）』（*ဥဒ္ဓာန်ဟံသာ / Ujjan Hongsa*）

モン語、ビルマ語、英語のトリリンガル雑誌。評論、小説、詩からなる文芸雑誌。筆者が現物を確認できたのは第 1 号と 2 号。第 1 号は 1993 年刊行か（許可番号より推測）。第 2 号は 1995 年 11 月号（同号背表紙より）。継続性不明。両号とも発行部数 2,000 冊、価格 60 チャット。合法的に出版されたものと思われる。第 1 号の構成はモン語（計 69 頁）、ビルマ語（計 83 頁）、英語（計 18 頁）。

モン文芸文化委員会は別組織として各地に存在するが、ヤンゴン、モーラミャイン、ヤンゴン諸大学、モーラミャイン大学、イエジン諸大学の各モン文芸文化委員会 5 団体が合同で出版したのが同誌（第 1 号と 2 号の序文より）。



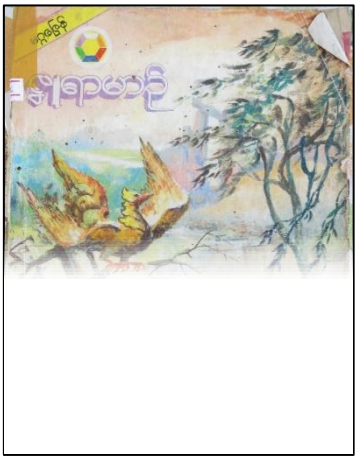
『ウチャーン・ホンサー（ハンサ鳥の園）』創刊号の表紙

[47] 過去の記事が Internet Archive によって保存・公開されている〈https://web.archive.org/web/20051023184017/http://www.kaowao.org/index.php〉。ほかアメリカ議会図書館に記録が保管されているもよう〈https://www.loc.gov/item/lcwaN0006567/〉（ともに 2023 年 3 月 5 日閲覧）。

『ジャヌー・ラーマーン』（မဂ္ဂဇြန် ဌားရာမာဉ်）

モン語、ビルマ語、英語の 3 言語で書かれる。評論、小説、詩からなる文芸雑誌。確認できた現物は第 3 号＝1996 年 11 月号（背表紙）。継続性不明。第 3 号の発行部数は 3,000 冊、価格は 60 チャット。全 167 頁。合法的出版と思われる。

ヤンゴン諸大学、イエジン諸大学、モーラミャイン大学、パアン・カレッジ、モーラミャイン工業短期大学、タトン農業短期大学の各モン文芸文化委員会のリーダーシップのもと出版された雑誌（見返しより）。『ハンサ鳥の園』が市民団体の発行であるのにたいし、この『ジャヌー・ラーマーン』は大学生団体が発行する。

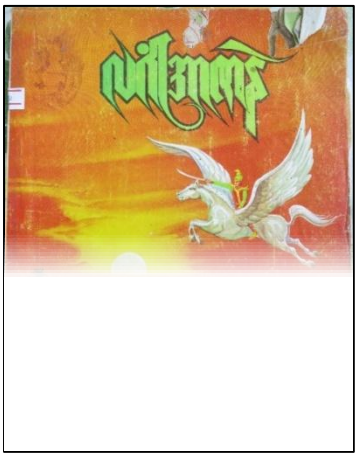


『ジャヌー・ラーマーン』
第 3 号の表紙

『レゲーム・アージャーノア（志士の歩み）』（မဂ္ဂဇြန် လဂါအာဇာန်）

評論、詩、小説からなる全てモン語の文芸雑誌。合法出版。初号と 2000 年 12 月号（No.5）の現物を確認。登録番号より初号は 1996 年刊行と思われる。ヤンゴンのモン僧グループが発行する年刊誌（初号序文より）。初号の発行部数は 2,000 冊、価格 60 チャット、全 141 頁。2000 年 12 月号は発行部数 1,000 冊、全 167 頁。その後の継続は不明。

モン僧が出版者の場合は、社会主義時代の手書き小冊子『新時代』『知恵の光』と同じように、全てモン語で書かれている。ただし同誌は印字。



『レゲーム・アージャーノア』初号の表紙

（B）限定頒布により軍政期から地下出版を黙認されてきたと思われる雑誌

『アマーッテイン』（လိက်ကွပ် အမာတ်ဒိန်）

小暦 1367 年［西暦 2005 年］初号（Vol.1, No.1）。全てモン語で書かれている。評論や詩が載る文芸雑誌。序文にはモンの民族、言語、宗教の発展を目的に発刊したとある。国内限定頒布型の地下出版だろうと思われる。2 ヶ月に 1 回の刊行を目指すとあるが（p.35）、その後の継続性は不明。初号は全 55 頁。ロゴの共通性より、作成したのは既出の同名新聞関係者と同じと推測される。

有用な資料として、2005 年ヤンゴンのモン僧雨安居リスト（どの僧院に何名の僧が住むか、ただしラーマンニャ派という宗派のみ）と、同年の政府ダンマーサリヤ教学試験に合格したモン僧の名簿が収録されている。

『教学誌』（လိက်ကွပ် ပရိယတ္တိ）

冊子形式のモン語雑誌。主に評論からなる文芸雑誌。初号は小暦 1365 年号［西暦 2003 年］。第 4 号から巻号が付される。年刊誌であり、筆者が現物を確認できたのは、第 1 号から、小暦 1378 年［西暦 2016 年］第 14 号まで。ヤンゴンのモン僧院にある知恵波羅蜜（ポンニャーパーラモイ）協会が発行者。内容も仏教関係の記事が多い。印刷者・出版者の登録番号がないので地下出版かもしれない。他誌にない貴重な情報として、毎号、政府ダンマーサリヤ試験に合格したモン僧の名簿が載る。

『モンの未来』（အနာဂတ်မန် / The Future of Mon）

2008 年号（No.9）の現物があり、評論、詩、インタビュー、小説などを掲載した文芸雑誌である。全てモン語で書かれる。ほか 2004 年（No.5）、2006 年（No.7）の現物と、2009 年（No.10）、2012 年（No.13）の電子版[48]があり、年刊誌と思われる。

詳細は不明だが、ヤンゴンにはこの雑誌と同名のモン僧グループがあり、そこが同誌を発行していると推測される［cf. 2008 年号（No.9）：p.103-106］。

『モンの未来』2008 年号の表紙

（C）国境地域、武装組織実行支配地域、海外などで発行され、軍政期は発禁だった可能性のある雑誌

『ライェボップポー（飛翔ハンサの光）』（M. လိက်လှေင် လျှံစိုပ်ပဝ် / The Lights of the Flying Sheldrake）

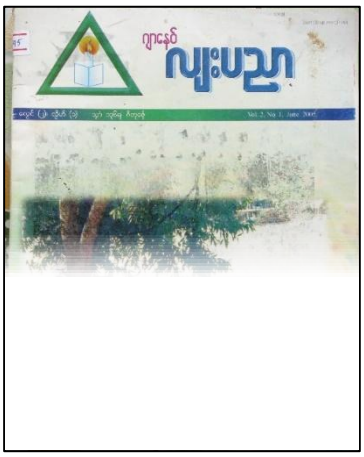
NMSP が発行するモン語の情報誌。現物を確認できたのは No.4（2010 年 8 月）。内容は、NMSP 主催のモン民族記念日や、そこでの NMSP 党首挨拶、各種関連団体の会合や活動の記録など。地下出版。刊行頻度、継続性、発行部数などは不明。価格表示なし。

『新モン国誌』（M. ဣာနော်ချင်မန်တို / B. မွန်ပြည်သစ်ဣာနယ် / The New Mon State Journal）

NMSP が発行する雑誌。1999 年 11 月号（Vol.21, No.1）と、2009 年 12 月号（Vol.29, No.1）の現物を確認。詩、評論、小説からなる文芸雑誌。ただし一部にはモン革命記念日などの行事にかんする情報も載る。1999 年 11 月号はモン語のみ（全 80 頁）。2009 年 12 月号はモン語とビルマ語のバイリンガル雑誌（全 144 頁）。地下出版。刊行頻度、

[48] Anagodmon〈https://anagodmon.blogspot.com/〉；FLIPHTL5〈https://online.fliphtml5.com/yafuu/pmeg/〉（ともに 2023 年 3 月 25 日閲覧）

継続性、発行部数などは不明。価格表示なし。



『ライェポンニャー誌』2005 年 6 月号の表紙

『ライェポンニャー誌（知恵の光）』（ဂျာဓနော် လျှံးပညာ）

NMSP の教育局が発行。現物を確認できたのは 2005 年 6 月（Vol.2, No.1）。詩と評論からなる文芸雑誌。モン語とビルマ語で書かれたバイリンガル雑誌。地下出版。継続性不明。既出の同名小冊子とは別物。

NMSP 教育局の流れをくむモン民族学校は、現在、ミャンマー政府からも活動を容認されているバイリンガル教育機関として重要であり、その過去の経緯を知るうえでこの雑誌は有用と思われる。

『タインパカーオ』（M. ဂျာဓနော် တိုင်ပ်ကော် / Tung Pakao Journal）

『タインパカーオ』2007 年 12 月号掲載の風刺漫画

2007 年 12 月号（No.3）の現物を確認。米国モン国再興協会が発行。詩や評論からなる文芸雑誌。同号はモン語（計 104 頁）と英語（p.105～117 の計 13 頁）の二言語で書かれる。

掲載された風刺漫画（ラウィーチャーン作）は、「モン人なら民族を愛せ、モン語の読み書きができなくてはならない、モン語を話さなくてはダメだ」とモン語で学生に訴えるモン文字教師のそばで、「パパもう帰ろうよ、お腹へった～」と英語で話しかける子供の姿を描いている。海外移住者の世代間言語ギャップや、民族教育をおこなう教師でも実子に母語を教えるのは難しいという矛盾と困難をうまく表現している。

『海外モン通信』（M. လိက်လျှင်ပရိုင်မန်ချင်သအာင် / OMCC Bulletin）

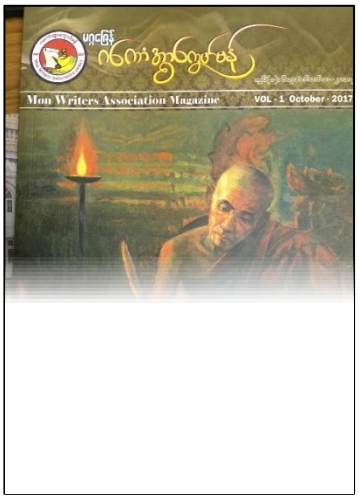
海外モン連携委員（The Overseas Mon Coordination Committee, OMCC）が発行する雑誌。2012 年 2 月号（No.7）の電子版がネット上で読める[49]。現物未確認。各国に移住したモンの活動記録とともに、NMSP 関係の記事が多い。刊行頻度や紙媒体の発行状況などは不明。

[49] YUMPU〈https://www.yumpu.com/id/document/read/7952913/omcc-bulletin-no7-monland-restoration-council〉（2023 年 3 月 25 日閲覧）

（D）２０１１年民政期以降に創刊した新興雑誌

『モン作家協会誌』（M. မဂ္ဂဇြန် ဂကော်အစ္စာကွေဟ်မန် / Mon Writers Association Magazine）

モン作家協会の発行する雑誌。確認したのは創刊号の 2017 年 10 月号（Vol.1）。評論、詩、小説などからなる文芸雑誌。前半モン語（1-132 頁）と後半ビルマ語（133-255 頁）のバイリンガル誌。同号は 3,000 チャット。



『モン作家協会誌』
2017 年 10 月創刊号の表紙

『ラーモンニャ・サンガヌッガハ』（M. လိက်ကွပ်ရာမညသံဃာနုဂ္ဂဟ / Rāmonña Saňggā Nuggaha）

ラーモンニャ・サンガヌッガハ協会（全モン地域）が発行する年刊誌。同協会はモン僧の組織と思われる。過去号の写真から 2010 年を創刊号とする年刊誌であることがうかがえる。現物は 2012 年号（Vol.3；全 73 頁）、2013 年号（Vol.4；全 93 頁）を確認。評論や詩からなる文芸雑誌。全てモン語で書かれている。モンの仏教僧が発行する場合、バイリンガルではない民族語のモノリンガル雑誌になる傾向は、前の時代から変わらないようだ。

3. タイにおけるモン関連の逐次刊行物

タイではミャンマーほど多くのモン関連の逐次刊行物は発行されていない。重要なものとしては、時事情報を中心にかつて発行されていた『モン通信』と、現在も定期刊行がつづいているモン民族団体発行の文芸雑誌『モンの声』の２つがある。

『モン通信』（T. ข่าวสารมอญ / Mon News）

2001 年～2005 年の巻号（一部）の現物を確認。各号 15 頁ほどからなる中綴じ小冊子。基本的にはタイ語で書かれているが、一部モン語の記事もある。発行者は Mon Information Service Bangkok（**สำนักข่าวสารมอญ กรุงเทพฯ**）。創刊年はおそらく 1995 年（巻号より逆算）。現在は刊行していない。

この『モン通信』は、発刊当初からずっとタイ国のモン人であるピサン・パラッシィン氏（**พิสัณห์ ปลัดสิงห์**）が制作編集してきた。きっかけはミャンマー側からタイへ逃れてきたモンの避難民の人びとが、タイ国側でも当局等によって人権侵害をうけるなど困難に苦しむ様子を知ったこと。発行期間は 9 年間。また印刷にあたってはチ

『モン通信』2001 年 6 月号
（Vol.7, No.26）の表紙

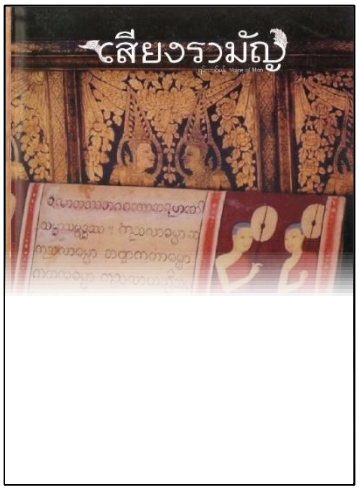
ャムニアン・シーダーオドゥアン氏（**จำเนียร ศรีดาวเดือน**）の協力をえた［2023 年 3 月 30 日、ピサン・パラッシィン氏への聞き取り］[50]。

2001 年 12 月号（Vol.7, No.29）にある定期購読者申込用紙によれば、年間 6 回発行、価格 150 バーツ。2005 年 3-4 月号（Vol.11, No.48）まで刊行頻度に変更はない。遅くとも 2003 年 3-4 月号（Vol.9, No.37）から購読料 200 バーツ[51]。ただし実際はお金を受けとることも、無償で提供することもさまざまであったという［同ピサン氏より］。

内容は、ミャンマー国モンの武装勢力や住民に関係する状況、タイ国モンの文化紹介など。ときにジャーナリスティックな鋭い批判がみられる。また同紙は、ミャンマー側の情報をタイに伝えるという意味で、二国のモンをつなぐ役割を担ってきた側面もある。記事の執筆者はピサン氏を中心に、タイ国モン僧のマハーチュワン比丘（**พระมหาช่วง**）など複数あり。

2011 年の洪水被害により、ピサン・パラッシィン氏のもとにあった過去号も破損紛失して揃っていない［同ピサン氏より］、まとめて保管している機関もなく、収集は困難。

『モンの声』（T. เสียงรามัญ / M. ရုမ်ဿာင်မန် / Voice of Mon）[52]



『モンの声』2009 年 1-3 月号（Vol.4, No.19）の表紙

バンコク・モン青年会（T. **ชมรมเยาวชนมอญกรุงเทพฯ** / M. ဂကော်သွတ်ဝုတ်ဗွဲမန် ချုင်ဝင်ကံက် / Mon Youth Community Bangkok）が発行する、毎号およそ 30～40 頁ほどの雑誌。タイにはモンの全国組織として有力な文化団体が 2 つあるが、バンコク・モン青年会（1975 年設立）はそのうちのひとつであり、この雑誌刊行のほか、モン民族記念日の年次開催をおこなっている。

使用言語は主にタイ語。一部はモン語記事。これはタイ国モンの人々の多くが、モン語を読めないことを反映している。

創刊号は 2006 年 1-2 月号。当初は 2 ヶ月に 1 回刊行していた（年 6 回）。創刊号のみ無料配布し、第 2 号から年間定期購読料 200 バーツを払った会員に自宅配送している（2010 年 5-6 月号から現在までは年間 250 バーツ）[53]。また民族記念日などタイ国内で開催されるモンの民族行事でも

---

[50] チャムニアン氏の Tech Promotion & Advertising Co., Ltd.（在バンコク都）は、タイでもっともよく知られたモン語ないしモン関連の印刷所。

[51] ピサン・パラッシィン氏については *Bangkok Post*（1996/2/27）も参照。ただし『モン・ニュース』については情報に誤りがあるようだ。

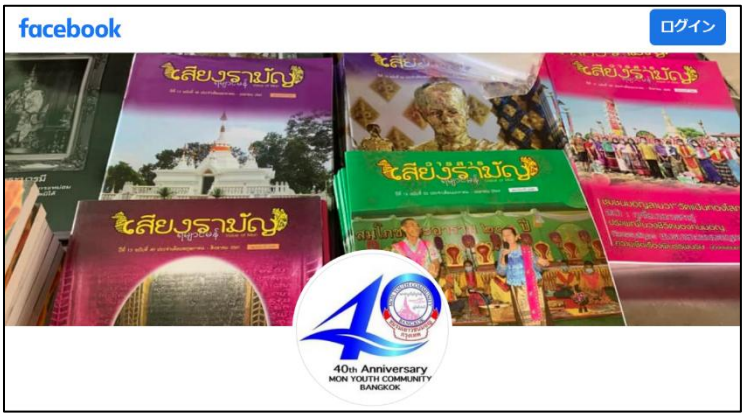
[52] 『モンの声』はモン語と英語のタイトルであり、タイ語では『ラーマンの声』と呼ぶ。ラーマンはモンの雅称であり、意味は同じ。

[53] 創刊から 2009 年 1-3 月号（Vol.4, No.19）まで編集長をつとめたオン・バンヂュン氏より（2009 年）。『モ

購入できることがある。

1 冊の単体価格は 2006 年 11-12 月号から 30 バーツ、2010 年 5-6 月号から 40 バーツ、2018 年 1-4 月号から 50 バーツ。

2 ヶ月に 1 回の刊行は創刊から 2010 年 11-12 月号（Vol.5, No.28）まで（ただし 2009 年は、1-3 月号、4～6 月は刊行なく、次は 7-8 月号）。その後は年間 6 回、4 回ないし 3 回の刊行を目指したようだが、実際は定期刊行できず、2011～2022 年の 12 年間で発行されたのは計 26 回（平均年 2 回ほど）。なお 2011 年 9-10 月号から 2018 年 1-4 月号まで、巻（Vol＝年）の付与が 1 年ずれているため注意（本当は Vol.7 だが Vol.6 表記など）。現在の最新号は 2022 年 1-8 月号（Vol.17, No.55）。創刊から 17 年間つづいており、民族雑誌としてタイ国内では息の長い部類に入るだろう。



『モンの声』の Facebook より
〈https://www.facebook.com/monyouthbangkok/〉
（2023 年 3 月 28 日閲覧）

発行部数は創刊時に 500 冊、2009 年および 2010 年に 1,000 冊[54]。現在は毎号約 800 冊発行、講読会員は約 450 名［現在の編集長パリンヤー氏より］。

編集長はバンコク・モン青年会の関係者（会長など）が交代でつとめてきた。現在の編集長は 7 人目。内容はタイ国モンの文化、言語、歴史にかんするものが多い。かつては執筆チームでタイ国各地のモン集落を訪れて合同でのインタビュー調査なども行っていた。

タイ国内では、バンコクにあるシリントーン人類学センター付属図書館（Princess Maha Chakri Sirindhorn Anthropology Centre Library）に、全てではないがかなりの巻号が揃っている[55]。また Openbase.in.th にて、とくに古い号の一部が PDF 版で閲覧可能。

4. まとめ

本章では、主にミャンマーにおけるモン民族逐次刊行物について、1948 年の独立から現在まで通時的に整理・概観してきた。またタイのモン民族逐次刊行物についても簡単にとりあげた。

ミャンマーでは〈静〉と〈動〉の両軸からなる構造が確認できた。〈静〉を支えてき

ンの声』についてはほか和田［2011: 94-98］。

54 オン・バンヂュン氏（2009 年聞き取り）と、2010 年に編集長をつとめたスカンヤー・バオヌート氏より（2010 年聞き取り）。

55 〈https://lib.sac.or.th/catalog/BibItem.aspx?BibID=b00057434〉

たのは主に文芸雑誌である。独立直後の民政期から社会主義時代、1988 年以降の軍政期、そして 2011 年民政期をとおし刊行されてきた。出版主体は大学生団体やモン文芸文化委員会などさまざまであるが、ビルマ語だけでなくモン語の記事を収録したバイリンガル雑誌、ないし英語をくわえたトリリンガル雑誌の形態を維持してきた点に特徴がある。さらにモン僧グループが発行する雑誌はモン語モノリンガルで編まれている。独立から現在まで国内の出版事情には大きな変化があったにもかかわらず、こうしたモン語文芸雑誌は変わらずに存続してきた。

〈動〉を担うのは主にエスニック・メディアだ。その活動が花開くのは、海外から運転資金とジャーナリズム教育の援助をうけた 1990 年代以降である。モンの場合はモン独立通信社と『フノンタイン』紙が現在まで活動をつづけている。また 2011 年以前の軍政期には、これら亡命系のメディアだけでなく、国内で地下出版が黙認されてきた例もある。『アマーッテイン』紙はそうした類のエスニック・メディアであり、現在まで刊行をつづけている。こうしたエスニック・メディアは、言論統制や出版自由化の変化にうまく対応しつつ、近年のネットやスマホ拡大の波に向き合いながら発行・配信されてきた。

そしてエスニック・メディアもまたモン語での配信に力を入れており、モン文語共同体の持続的創造ないし再生産という点で、文芸雑誌とともに〈静〉の側面を支えてきた。こうした逐次刊行物がつくりだす固有言語空間は、いわばネーションの身体の一部そのものであり、各種団体は立場をこえてモン・ネーションの創出・再生産という同じ夢を追いかけてきた。

一方、タイは西の隣国ほど出版事情に大きな変化がみられず、〈動〉がない分、それと対照的な〈静〉の側面も際立たない印象をうける。逐次刊行物『モンの声』は 50 号をこえ安定的な持続性をみせているが、その一方で、ミャンマーのようにさまざまな主体が出版活動を展開し、その結果、協力や競合が活力を生み出すような動きはタイ国モンのあいだにはみられない。もともとタイ国のモンは、ミャンマーより人口が 10 分の 1 ほどしかなく、集落は各地に分散しており、協同して民族運動を行うには不利な条件にある。さらにタイ国モンの人びとのあいだで、モン文語はコミュニケーション手段としての機能をすでにほとんど失っており、ミャンマーのモンとは文語共同体の夢を共有できなくなっている。そうした困難をこえて、今後いかに雑誌刊行をはじめとする民族運動を展開するか注目される。

最後に今後の課題を示して筆をおきたい。本章は全体像を示すことを優先したため、各紙/誌についてきちんとした内容分析ができなかった。かなり粗っぽい読みであることを認めなければならない。より詳しく読み込めば、『フノンタイン』『アマーッテイン』『ラウィーホンサー』『モンの声』のどれもが、社会情勢の変化や編集者の交替などによって内容を変化させていることがわかるに違いない。そこからミャンマーやタイの少数民族の動向についてさらなる議論を引き出すこともできるかもしれない。た

だし、こうした少数民族逐次刊行物は、通時的な収集が難しいという問題を抱えている。モンの場合、現状として私蔵資料も多いが、今後は図書館などの機関による収集と保管、可能であればデジタル化による公開といった面もまた、分析のために重要かつ必要な作業である。

参考文献

Allott, Anna J. 1994. “Burmese Ways” In *Index on Censorship*, Vol.23, pp.88-101.

アンダーソン，ベネディクト（白石隆・白石さや訳）. 2007=1991.『定本 想像の共同体：ナショナリズムの起源と流行』書籍工房早山.

Aye Lei Tun and Lehmann-Jacobsen, E. 2020. Ethnic Media Study: Media Habits and Media Representation of Ethnic Minorities in Myanmar, International Media Support (IMS).

Bauer, Christian. 1990. “Language and Ethnicity: The Mon in Burma and Thailand”, In *Ethnic Groups across National Boundaries in Mainland Southeast Asia*, Gehan Wijeyewardene (ed.), pp.14-47, Singapore: Institute of Southeast Asian Studies.

Brooten, Lisa. 2006. “Political Violence and Journalism in a Multiethnic State: A Case Study of Burma (Myanmar)” In *Journal of Communication Inquiry*, Vol.30, No.4, pp.354-373.

Brooten, L., McElhone J.M., and Venkiteswaran G. 2019. “Introduction: Myanmar Media Historically and the Challenges of Transition” In *Myanmar Media in Transition: Legacies, Challenges and Change*, Lisa Brooten, Jane Madlyn McElhone and Gayathry Venkiteswaran (eds.), Singapore: ISEAS, pp.1-56.

Fox, M., Helbardt, S., Hahn, O., and Krebs, F. 2023. ““Burmese Days” of Digitalization: From a Decade’s Dream of Myanmar’s Modern Journalistic Culture and Media System in the Making to a Press Freedom’s Nightmare of the Military Putsch in 2021” In *Different Global Journalisms: Cultures and Contexts*, S. Bebawi and O. Onilov (eds.), Palgrave Macmillan, pp.35-61.

McElhone, Jane Madlyn. 2018. “Local Media and Myanmar’s Political Opening” In *An Unfavorable Business: Running Local Media in Myanmar’s Ethnic States and Regions*, Tessa Piper and Jane Madlyn McElhone (eds.), Media Development Investment Fund (MDIF), pp.9-11.

McElhone, Jane Madlyn. 2019. “The Metamorphosis of Media in Myanmar’s Ethnic States” In *Myanmar Media in Transition: Legacies, Challenges and Change*, Lisa Brooten, Jane Madlyn McElhone and Gayathry Venkiteswaran (eds.), Singapore: ISEAS, pp.210-228.

MDIF=Media Development Investment Fund（2020 年 10 月）, “Map of private local media in Myanmar’s ethnic states and regions”〈https://www.mdif.org/wp-content/uploads/2020/12/mediamap-myanmar-2020-dec.pdf〉（2023 年 3 月 5 日閲覧）.

မြန်မာ့ဆိုရှယ်လစ်လမ်းစဉ်ပါတီပါတီ. 1964. *တိုင်းရင်းသားလူမျိုးများအရေးနှင့်ပတ်သက်၍ တော်လှန်ရေးကောင်စီ၏အမြင်နှင့်ခံယူချက်*, n.d.: စာပေဗိမာန်ပုံနှိပ်တိုက်. ［ビルマ社会主義

計画党『原住民族にかんする革命評議会の見解』].
中西嘉宏. 2020.「自由とソーシャルメディアがもたらすミャンマー民主化の停滞」、見市健・茅根由佳編著『ソーシャルメディア時代の東南アジア政治』明石書店、pp.123-143
中西嘉宏. 2022.『ミャンマー現代史』岩波書店.
Santoso, Tosca. 2018. "Keeping Mon Language Media Alive" In *An Unfavorable Business: Running Local Media in Myanmar's Ethnic States and Regions*, Tessa Piper and Jane Madlyn McElhone (eds.), Media Development Investment Fund (MDIF), pp.42-44.
Shorto, H. L. 1962. *A Dictionary of Modern Spoken Mon*, London: Oxford University Press.
Smith, Martin. 1994. "Unending War" In *Index on Censorship*, Vol.23, pp.113-121.
South, Ashley. 2003. Mon Nationalism and Civil War in Burma: The Golden Sheldrake, London and New York: Routledge.
Soe Lynn Htwe. 2017. *The Role of Ethnic Media in the "New Myanmar"*, Understanding Myanm'r's Development Research Report No.06, Chiang Mai: RSCD, Chiang Mai University.
Tessa Piper and Jane Madlyn McElhone (eds.), *An Unfavorable Business: Running Local Media in Myanmar's Ethnic States and Regions*, Media Development Investment Fund (MDIF).
和田理寛. 2011.「民族の覚醒と言語の延命：タイ国におけるモンの民族組織体とモン語の継承運動についての民族論」大阪大学言語軍歌研究科修士論文.
和田理寛. 2016.『民族共存の制度化へ、少数言語の挑戦：タイとビルマにおける平地民モンの言語教育運動と仏教僧』風響社.
和田理寛. 2017.「モン民族宗派の解体と形成：タイとビルマにおける国家僧伽の形成と少数民族」京都大学アジア・アフリカ地域研究研究科博士論文.

【報道記事】

Bangkok Post（1996 年 2 月 27 日付）, Naovarat Suksamran, "Yadana Natural Gas Find Turns Mon Legend into Reality".
BNI=Burma News International（2023 年 1 月 6 日付） "Ethnic Media in Burma Disappearing after Coup"〈https://www.bnionline.net/en/news/ethnic-media-burma-disappearing-after-coup〉（2023 年 3 月 30 日閲覧）.
IMNA= Independent Mon News Agency（2011 年 10 月 26 日付）, "ကမ္ဘတီလိက်ပတ် ယေန်သွာင်မန် ဗဟို ပတိတ်ဂျာနယ် ဘာသာမန်"［中央モン文芸文化委員会がモン語雑誌を刊行］〈https://mon.monnews.org/2011/10/ကမၼတၽိလိကၾတၵ-ယန္ဆာင္မ/〉（2023 年 3 月 25 日閲覧）.
IMNA（2013 年 2 月 21 日付）, "Publication of Mon Language News Journals Permitted" 〈https://monnews.org/2013/02/21/publication-of-mon-language-news-journals-permitted/〉（2023 年 2 月 9 日閲覧）.

IMNA（2017 年 1 月 6 日付）, “Mon State Hluttaw publishes its first journal” 〈https://monnews.org/2017/01/06/mon-state-hluttaw-publishes-its-first-journal/〉（2023 年 2 月 9 日閲覧）

IMNA（2021 年 11 月 3 日付）, “ဂျာနေဝ်အမာတ်ဒိန် ကျော် လိက်ပရိုင်သွံင်တိုင် ပံင်ကော်တဲ့ ကျောန်ဗဒ့် ဝိုင်သီကို့တက်ကျာ ပရေင်လိက်ပတ်မန်” ［アマーッテイン紙とフノンタイン紙がモン語の本について合同会議を開催］ 〈https://mon.monnews.org/2021/11/ဂျာနေဝ်အမာတ်ဒိန်-ကျော်-လ/〉（2023 年 3 月 5 日閲覧）.

IMNA（2022 年 5 月 17 日付）, “Mon National College to Open” 〈https://monnews.org/2022/05/17/mon-national-college-to-open/〉（2023 年 3 月 26 日閲覧）.

Irrawaddy（2017 年 6 月 10 日付）, Ko Htwe, “Ethnic Media in Burma” (Guest Colum) 〈https://www.irrawaddy.com/opinion/guest-column/ethnic-media-in-burma.html〉（2023 年 3 月 30 日閲覧）.

Irrawaddy（2019 年 11 月 29 日付）, Lawi Weng, “After Struggling for 20 years, Mon Newspaper in Myanmar Now Faces Fight to Survive” 〈https://www.irrawaddy.com/lytbox/in-person/profile/struggling-20-years-mon-newspaper-myanmar-now-faces-fight-survive.html〉（2023 年 2 月 9 日閲覧）.

Irrawaddy（2022 年 11 月 9 日付）, Hpone Myat & David Aung, “How the Coup Split Myanmar’s Media Landscape” (analysis) 〈https://www.irrawaddy.com/opinion/analysis/how-the-coup-split-myanmars-media-landscape.html〉（2023 年 3 月 5 日閲覧）.

Mizzima（2013 年 2 月 13 日付） “First Mon language newspaper in 50 years to be published” 〈https://www.bnionline.net/en/mizzima-news/item/14777-first-mon-language-newspaper-in-50-years-to-be-published-.html〉（Burma News International=BNI のアーカイヴより、2023 年 3 月 7 日閲覧）.